室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

室蘭工業大学研究報告. 文科編 第9巻第2号 全1冊

メタデータ	言語: eng 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2949

室蘭工業大学

研究報告

文科編

第九巻 第二号

昭和五十二年十二月

MEMOIRS

OF

THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

VOL. 9 NO. 2
Dec., 1977

MURORAN HOKKAIDO

JAPAN

Editing Committee

S. Takeuchi	President	*Chairman of the Committee*
K. Orikasa	Prof.	*Electrical Engineering*
M. Murozumi	Prof.	*Industrial Chemistry*
H. Yamaguchi	Prof.	*Mineral Development Engineering*
H. Kondo	Prof.	*Civil Engineering*
S. Hoshino	Prof.	*Mechanical Engineering*
H. Sugawara	Prof.	*Metallurgical Engineering*
H. Watanabe	Prof.	*Chemical Engineering*
H. Ichiba	Prof.	*Industrial Mechanical Engineering*
M. Obata	Prof.	*Architectural Engineering*
Y. Kumagai	Asst. Prof.	*Electronic Engineering*
S. Oide	Prof.	*Literature*
Y. Kinokuniya	Prof.	*Science*
Y. Ueda	Asst. Prof.	*Electrical Engineering (Evening Session)*
M. Yoshida	Prof.	*Chief Librarian*

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals. They consist of two parts, Science and Engineering and Cultural Science. When they amount to four numbers, they form one volume.

室蘭工業大学研究報告　第九巻　第二号

文　科　編

目　次

特性語及び形容詞チェックリスト ……田 中 潜次郎　2（1）275

『息子と恋人』について
　　— キリスト教的世界からの解放 —……豊 国　孝　2（43）317

『リチャード二世』地誌考……竹 内　豊　2（61）335

特性語及び形容詞チェックリスト

田　中　潜次郎

Trait-adjectives and an Adjective Check-list

Senjiro Tanaka

An adjective check-list (ACL) as a simple technique for assessing personality was developed. ACL, the items of which contained 105 common trait-adjectives, was administered to 487 male college-students, and was analyzed by the method of pattern classification. Four dimensions were extracted. The first and second dimensions were highly correlated respectively with "introversion-extroversion" and "likableness" rating-scales. The third seemed to indicate the dimension of "tension". The fourth was not interpreted.

特性語（trait-adjectives, trait-names, trait-words）とは，人の性格ないしは人格を表現する日常の単語および非常に短い語句を指す。操作的には，特性語の条件を予め決め，これに沿って辞書から取出される単語であると定義できる。或いは，普通人の記憶を辞書とみなし，この中から「性格を表わす言葉を書くように」という教示下で取出される単語だということもできる。

次に，形容詞チェックリスト（Adjective Check-lists, 以下 ACL と略称）とは，形容詞を質問項目として，これに対する諾否を評定者に答えさせる方法を指す。この方法の起源は，言語の中に対象の様態を表現する一群の単語すなわち形容詞が発生したときまで溯ることができるが，心理測定法の一種と認めうるほどに整備されたのは Hartshorne and May(1930)*からであるといわれる。その後，種々の対象の様々の様態を表現できるという形容詞の性質

* Hartshorne, H. and May, M. A. 1930 *Studies in the nature of Character : III. Studies in the organization of character.* New York: MacMillan. ——Gough and Heilbrun より引用——

の故に，ACL は態度，感情，性格などいろいろの心理現象に対して適用されてきた。しかしここでは，形容詞の一部をなす特性語を項目とする場合，従って性格を測定対象とする場合について ACL という名称を使用する。これは Gough and Heilbrun (1965) の使用法に従ったものであるが，厳密には特性語チェックリストと呼ぶべきものであろう。なお，ACL はその項目が単語である点で，文章表現を項目とする人格質問紙 (Personality questionaires) とは異なり，評定形式が「はい」か「いいえ」の二分型である点で，「かなり」や「すこし」のような段階を設ける評定法 (Rating methods) とは異なる。

さて，ACL はその項目が日常の単語から成るため，きわめて短時間に実施できること，評定者に不安感や抵抗感をあまり生じさせない，といった長所をもつ。Gough and Heilbrun はこれに着目して 300 語 24 尺度から成る ACL 標準版 (the Adjective Check List) を作製した。そしてこれを人格質問紙に準じる測定法として位置づけているようである。このような ACL の特徴づけは大筋において適切だといえるが，ただ，特性語を項目とすることから自ら生じる ACL の測定側面の特異性に対しても当然配慮する必要があろう。

そこで，本稿ではまず，特性語がどのような性質をもつものかを知るために，諸家の特性語論を検討する。ただ心理学において問題とされるのは特性語によって指示される人格側面であって，特性語そのものではない。後述する諸論にしても Allport を除けば，特に目立つ議論は展開されていない。従ってここでの作業は，諸家の人格論ないしは特性論の中に含まれる特性語論を抜き出すという形をとることになるだろう。次に，これらの所論を参考にして特性語の特徴づけを行い，ACL 作製への手順について考察し，最後に ACL の作製適用例を提示し，人格質問紙との比較をする。

1。G. W. Allport の特性語論

Allport は，個々の人格の独自性を重視する点で，自我心理学や臨床心理学の分野で高い評価を受けてきた。また彼は，人格理論の中に特性 (traits) の概念を導入した点で，のちに因子分析法と結合して展開される共通特性理論

の先駆者としても評価されている。

しかし本稿は，人格や特性そのものを問題とするのではなく，そのレッテルである特性語を問題にするのであるから，上記の評価とは異なる点に注目することになるだろう。すなわち，彼は特性語を収集分類する研究を行なったが (Allport and Odbert, 1936)，ここにみられる Allport の方法論の特徴を一口にいうならば，病理的，数理的，実験的，哲学的といういわば専門的な接近法をとらず，むしろ私達が日常接する事柄から問題をとりだし，その水準でこれを整理するが，それ以上の抽象はむしろ避けようとする，という意味で常識的立場にたつというところにあるように思われる。

Allport and Odbert はその論文の冒頭に，性格学者 Klages の次のような言葉を引用している。

> 言語は無意識的洞察においていかなる秀れた思想家の鋭さにも勝っている。適度の才能を持つ者なら人間の心に関する語句を調べるだけで，それを怠ったどんな賢人よりも人間の心をよく知るであろうし，観察や機械や実験によって得られる知識のたぶん千倍の知識は手に入れるであろう。
>
> ——Ludwig Klages, *The Science of Character*, p. 74.

やや大胆に過ぎるともいえるこのような言葉を敢えて引用したところに，Allport の特性論が日常生活で使われる特性語の注意深い検討から出てきたことが伺える。このような態度が実際の論述の中でどのように展開されるかを次にみていこう。

Allport における特性の概念は抽象的でもあり，また具体的でもある。これが抽象的にみえるのは，行動論的な諸概念のように行動に直接的関連をもつ水準で設定された概念ではなく，より内的な状態に関する概念として設定されているためであろう。一方，この概念は特性語の意味する概念枠に，完全にではないがかなりよく対応する。この点で特性はきわめて具体的な概念だといえる。たとえば「A君は正直だ」という言明は，A君が現実の場面でとる行動には直接言及しない点で，あいまいで根拠のない言明だともいえる。しかし，このような言明がひんぱんになされる背景には，これによってA君の過去の種々の行動をよく理解できるし，将来A君が様々の場面で起すであ

ろう行動を予測できる，という普通人の判断があると考えられる。こうしてAllportは「正直」などの特性語にほぼ対応する人格要因すなわち特性の存在を想定する。このようにAllportにおいては特性語は，特性という実在の対象，もしくは実在が想定される対象を表現する枠組と考えられている。

ここで注意すべきことは，今日までの多くの人格理論の人格記述がきわめて難解な専門的概念によってなされているのに対し，Allportは日常語で人格を記述しようとする点である。この点で，Allportの特性論は，他の多くの専門的理論とは大きく異なっているのである。

1）対象枠としての特性語

ここでは，特性という概念の特徴を，オルポート（1968）に従って，他の構成概念と比較して説明する。なお，以下に述べることはすでに多くの心理学者が紹介してきたところであり，これをくり返す必要はないとも思われるが，ここでは，特性語を念頭において特性を論じる立場から紹介したい。

①感情と特性との相異：感情は一定場面での心の一時的な状態であるのに対して，特性は場面依存の少ない心の比較的恒常的な状態である。これを表現用語から区別すれば，たとえば「恥ずかしい」は感情語であり，「恥ずかしがり」は特性語だといえる。表現用語の面からみれば，感情と特性は比較的容易に分類できるようである。

②習慣(habits)と特性との相異：習慣は学習心理学の基本概念の一つであるが，これをオルポートに従って人格心理学の分野に適用すれば，次のような点で特性とは異なる。すなわち，習慣は個々の行動へ向う傾向を指すのに対して，特性はこれらが統合された一般的傾向を指す。たとえば，「毎日歯をみがく」や「食事前には手を洗う」や「いつも清潔な下着をつけている」のような表現は個々の習慣に言及するものである。これに対して，これらの行動の背景には「きれい好き」という特性が存在し，これが個々の行動を統制する，とAllportは考える。

なおこのAllportの考え方に反対する立場に反特性論（anti-trait theory）がある。これによれば，もし特性が個々の行動を統制する働きをもつ人格単

位であるならば，単一の特性から生じる複数の行動の間には共起的な傾向がみられるべきである，とする。これを検証すべく，いくつかの「正直な」行動の出現傾向を調べた結果，これらの行動の間には有意な相関が見出せなかった。従って，正直という特性を経験的な単位として認めることはできない，と反特性論は考えるのである。

しかし習慣に対する特性のちがいは上述の面だけでなく，次のような面にもみられる。すなわち，習慣は行動それ自体へ向う傾向を意味するが，特性は行動の機能への反応傾向を意味する。たとえば，「礼儀正しい（*polite*）」人間は，或る文化圏にあるときには食事中にゲップをしないが，別の文化圏にいるときには食事に満足していることを示すために進んでゲップをする。ゲップをするとしないとは行動の現象面では相反するが，各文化における行動の機能の面では同一である。このような機能的等価化がなされるのは，*polite* という特性をその人間がもつためである，と Allport はいう。例はあまり適切なものとはいえないとしても，特性に機能的等価化の働きがあるとする点は他の心理学者のよく注目するところである。しかしここでそれに劣らず注目されねばならないのは，そのような働きをもつ特性を適切に表現する *polite* という名前が既に日常語の中にある，という事実である。

③態度（attitudes）と特性との相異：まず，態度は特定の対象に向けられた傾向を意味するのに対し，特性は様々の対象に向う一般的傾向を意味する。また，態度は対象に対して接近―回避という運動的特徴をもつが，特性はそれに至る以前の内的状態をいう。

これを表現用語の面から考えれば次のようになろう。たとえば，多くの場合にA君は「人なつっこい」が，B君は「つっけんどん」であるとする。ここではA君は「人なつっこい」という特性をもち，B君は「つっけんどん」という特性をもつといえよう。ところがC君の場合には相手によって「人なつっこく」なったり，「つっけんどん」になったりするとしよう。このC君の特性は「好き嫌いがはげしい」とか「裏表がある」のような文章で表現するのが適当であって，「人なつっこい」や「つっけんどん」はむしろC君のその

相手に対する態度をあらわすと考えるべきであろう。

ともかく，特性は人格心理学的概念であり，態度は社会心理学的概念である。そして各々は各々の分野で欠くことのできない重要な概念であって，一方を他方に還元するのは危険であろう。しかし，その表現用語の点からみると，両者には重複する部分がかなりあるようである。

④因子或いは次元（factors or dimensions）と特性との相異：最近の著書（オルポート，1968）では，以前には（Allport and Odbert, 1936）特性で一括されていた概念が，共通特性（common traits）と個人的傾性（personal dispositions）とに分けられている。そして，特性は共通特性と同種の概念とみなし，因子や次元に近い概念と考えてもさしつかえないと述べている。なお，個人的傾性に特性の概念を適用するのを止めたのは，後に述べるように，特性語が個々人の独自性を完全には表現しえないことを認めたためであろうと思われる。

さて，特性が因子や次元と同種の概念であるというのは，その概念の適用領域が同じであるということに過ぎず，概念それ自体の性質にはなおかなりの相異があることに注意する必要がある。すなわち，因子や次元は因子分析や多次元解析にもとづく統計的な概念であるのに対し，Allport における特性はあくまで特性語を背景とする言語的な概念とみるべきである。また，因子や次元は解析手順の性質上その数が少なくされ，説明概念としての特徴が強調される。一方，Allport における特性は，行動を説明する構成概念であると同時に，記述概念の色彩をなお強く残している。従って特性の数ははなはだ多く，少なくとも特性語の数だけは存在することになる。

2）特性語による特性表示の限界

Allport の特性論において特性語が果す役割の重要性については既に述べた。しかし彼は特性語に全幅の信頼をおいてはいなかった。特性語の限界について，次に述べる①は当初から彼が認めていたことであり，②はのちに彼が認めたことである。さらに③はのちの他の研究者の指摘することである。

①特性語の数の不足：Allport and Odbert によれば，特性は実在するもの

であり，そしてこれを正確に表示したいという欲望が人間にはあるので，特性語が発生したという。それではすべての特性に既に名前がついているのであろうか。彼等によれば，まだ名前のついていない特性は沢山あるという。このような特性語の不足を補うために，句や複合語や比喩などが使われてきた。たとえば，「彼なら自分の葬式にも遅れてくるだろう」という表現には，*tardy* という特性語とは異なった独特の迫力がある。また，小説や伝記では或る人物のもつ一つの特性を，特性語を使わずにたとえば次のような文章で表現することがある。

> ゲーテは何事にも真実はあるという信念をもっていたので，どんな人物のどんな意見にもていねいに耳を傾けた。 (Allport and Odbert, p.31)

②個人の独自性表示の限界： Allport and Odbert は類義語をまとめようとはしなかった。これは，彼等が類義性 (synonymy) という考え方自体に疑問をもったからであると思われる。

たとえば，神経症 (*neuroticism*) と内向性 (*introversion*) の間に統計的な相関があるとすれば，因子分析的研究では両者は単一の因子にまとめられてしまう。しかし個々の人間をとってみれば，神経症が中心的な特性であって，内向性はこれから派生した特性にすぎぬ人もいる。他方，内向性が中心的な特性であり，神経症とはみなせない人もいる。この場合には，神経症の人にある葛藤が存在しないからである。このように個々の人間をとってみれば，その内部で演じられる諸特性の役割は様々であるから，表面的な相関だけでみるのは危険だという (pp. 15－16)。

個々の特性語の類義性よりは独自性を強調する傾向は次の事例にもあらわれる。すなわち，「神を恐れるが臆病ではない (*fearful* but not *cowardly*)」とか「高潔であるが高貴ではない (*upright* but not *honorable*)」のような表現を，統計的心理学では，文学的ないいまわしの違いにすぎぬとして，類義語か同義語としてまとめてしまう。しかし Allport and Odbert によれば，*fearful* but not *cowardly* な人間は第一次大戦時の戦士の中に実在したし，*upright* but not *honorable* な人間は昔のピューリタンの中に実在した。従ってたとえ

ば，ピューリタンを理解するためには，*upright* と *honorable* とは厳密に区別されねばならない，という（p．32)。

このあたりの事例になると，Allport の根本姿勢である日常用語からの考察というよりは，むしろ，精神科医が患者の症状を記述する場合や，思想史家が一定の時代精神を表わす鍵となる概念を探す場合などにみられるような専門的な言語使用を行なっているようにも思われる。しかしそうはいっても，Allport にあっては，特性語は何よりもまず個々の人格の独自性を記述するものでなければならなかった。そのためには特性語相互の類義性よりは，むしろその独自性を強調する必要はあったのである。

しかし，のちの著書（オルポート，1968）では，個々の人格の独自性すなわち個人的傾性は特性語によっては十分には記述されえないことを認めて次のようにいう。

> ……しかしわれわれが今，特徴に対して名前を与えているというこの事実は，個人の生活から特徴を抽象し，それがあてはまるような他の生活に適用しようとしているにほかならない。言語は一般的なものである。〝この少年〟という場合ですら，……二つの抽象語を用いているのである。フランクリン・ルーズベルトというような固有名のみがやっと自然界における一つの独自の個人的事象を名指すのである。(460ページ)

たしかに，固有名の果す役割の重要性は，私達の生活の随所に見出されることである。たとえば，経験豊かな教師は何はともあれ生徒達の名前を迅速におぼえてしまうものである。そのことは，生徒達が「活発」か「おとなしい」か，算数が好きか嫌いかを知る以上に，彼等を知ることになるからなのであろう。なおオルポートは別のところでも（142－146ページ)，自己同一性の形成に固有名が重要な役割を果すことに言及している。

ところで，特性語は固有名のように個人の独自性を表現する機能をもちうるであろうか。たしかに言語発達の初期にはそのような機能をもつことがある。たとえば或る幼児においては，自分や自分の所有物はすべて「かわいい」のであって，「すてき」でもないし，「かっこいい」のでもない。そして「かわいい」という表現は他の誰に対しても適用されてはならず，自分に対して

のみ適用されるべき表現なのである。つまり，この幼児においては「かわいい」はその幼児の固有名と類似の機能をもつ。しかし，言語発達はこのような記号と特定の対象との融合の段階から，両者の間に距離が生じていく（distancing）過程を含むといわれる（Werner and Kaplan, 1963, Chap. 3)。固有名以外の指示語はいずれもこの径路をたどって概念形成されていく。特性語もまた，特定の人格から離れていき，抽象されていくのであろう。

③特性語の非評価性への疑問：特性語と特性の関係を一般的にみれば，名前と対象の関係である。この関係に関する見解として，Allport and Odbert は素朴実在論（naive realism）とスコラ的実在論（Scholastic realism）と唯名論（nominalism）を挙げている。素朴実在論では，名前に対応して対象が実在するとされる。スコラ的実在論では，実在は「真」,「善」，あるいは「美」のような観念自体に求められ，外に現われる現象はその普遍概念の歪んだ影に過ぎぬとされる。唯名論では，名前は名前にすぎず，これに対応する実体を求めようとするのは徒労であるとされ，たとえば特性語は様々の心理現象を分析的に知覚することを失敗した結果にすぎぬという。従って，特性語に対応する特性という実体を想定するのは根拠のないことになる。

Allport は，特性語にほぼ対応する心理生理的構造すなわち特性が個々人の中に実在することを想定する。唯名論はこのような実体を否定し，スコラ的実在論は，現象にすぎぬ個々の人間の中に実在をもとめようとしない。名前と具体的現象の対応を認める素朴実在論の考え方が Allport の考え方に最も近いように思われる。もちろん彼の論述には，こう断定できない面はあるし，心理学とは分野の異なる哲学の枠組で解釈するのも危険であるが，彼の基本的な姿勢はそうであろうと思われる。

さて，素朴実在論的な観点からすると，あらゆる特性語にはそれに対応する特性があると考えねばならない。しかしそうはいえないことはもちろんであって，心理生理的構造としての特性を表示しない特性語も存在する。特性語と特性の対応を主張するためには，そのようなみせかけの特性語を除外する必要があるだろう。そこで彼等は，みせかけの特性語から真の特性語を分

類する基準として，単語の意味が非評価的（more neutral, less censorial）であるという基準を挙げた。たとえば，「すばらしい」とか「ひどい」という形容詞は，形容された人物の心理生理的な特徴を記述しているのではなくて，その人物を外から評価しているに過ぎない。従ってこのような形容詞は真の特性語とは認められない。Allport and Odbert はこの分類基準を設けた点，少なくともこの基準に気付いた点で，彼等の特性語収集が，それ以前の唯一の体系的研究である性格学者 Baumgarten の収集*に勝るとする。

このように，特性を記述するのが特性語であって，評価する単語は特性語ではないという Allport らの基準は，特性語の特徴を考える上で重要である。しかし彼等の集めた特性語を検討すると，これらは必ずしも非評価的ではないようである。これを裏づける資料に，Allport and Odbert の集めた特性語を好ましさ（likableness）の評定尺度上で評定を実施した Anderson（1968）の研究がある。この研究は実用的な観点から特性語の属性を調べたものであり，とくに理論的意味づけはなされていないのであるが，ここでは Anderson の結果を次のように解釈してみた。すなわち，もし特性語が非評価的ならば，特性語は尺度上の中間点を最頻点にして左右に正規様の度数分布をとるはずである。ところが実際には尺度の左右両極の近くにモードをもつ双峰性分布を示したのである。つまり多くの特性語は，好ましいか好ましくないかのいずれかの評価性を帯びていた。これと似た結果は他の研究（Edwards, 1970）や他の国語での研究（Hofstee, 1969）にもみられる。

結局，特性語の評価性はこのような統計的検討をまつまでもなく，日常の自明の事実といってもよいことかもしれない。たとえば，「正直」という特性語には，正直という特性を記述すると共に，その特性が好ましいという評価判断が含まれている。その特性が好ましさを欠く場合は「バカ正直」という表現が既に日常語の中に準備されているのである。

---

* Baumgarten, F. 1933 Die Charaktereigenschaften. *Beiträge zur Charakter- und Persönlichkeitsforschung,* Vol.1, Bern: A. Francke A. G.
Baumgarten, F. 1936 Character qualities. *Brit. J. Psychol.,* Vol.26.

特性語は特性を記述するものでなければならぬという基準は依然として重要であるが，非評価性の基準には上述のように疑問が残る。ただ，人格ないしは特性という対象を表現する枠として特性語を位置づけてしまうと，評価性の如き人格外要因が特性語の中に含まれるのを容認できなくなることは，その論理の自然な帰結であったように察せられるのである。

2．その他の特性語論

1）R. B. Cattell

Cattell は，のちに因子論と結合して展開される共通特性理論の主導者の一人であり，ここに引用する論文（Cattell, 1943）はその理論展開の端緒となるものである。彼は特性語を扱うにあたってまず，「人格の主要側面はすべて言語の中に登録されている」*という仮定をした。この仮定によれば，言語の綿密な検討がそのまま人格の解明につながるはずである。そこで Cattell は Allport and Odbert の収集した約 4,500 語の特性語を素材として，次のような手続で人格の基本的次元をとりだそうとした。

まず，約 4,500 語を意味的に類義や反義の群にまとめて，171 個の語群（phenomenal clusters）に分類整理した。その際の類義と反義の意味判断は，論理的にでなく，心理的な観点からなされた。たとえば，*acquisitive* と *generous* とは論理的にみれば反義関係といえるが，心理的には両語は別の属性を指示するから，各々別のクラスターに属させた。次に，171 個の現象クラスターを使って，被験者に彼等の知人 100 人の人格を評定させた。この評定結果からクラスター間の相関を計算し，その相関の大小にもとづいて，60 個の核クラスター（cluster cores or nuclear clusters）を取出した。そしてこれを人格の基本的因子とみなしたのである。

---

* "The position we shall adopt is a very direct one, verging on a pragmatic philosophy, and making only the one assumption that all aspects of human personality which are or have been of importance, interest, or utility have already become recorded in the substance of language." (p.483)

以上のような手順にみられるCattellの特性及び特性語論の特徴を，Allportと比較してみよう。まず，特性語が特性を記述しているとみなす点で両者は共通の考え方をもつとみなしてよいであろう。しかしその反面，両者は次のように非常に異なっている。第一に，Allportは特性語の類義性という考え方を疑うが，Cattellはこれをほぼ全面的にうけいれる。これに関連して第二に，Allportにおける特性は，個々の現象の微妙な差異に言及する記述概念としての色彩が強い。これに対してCattellは特性を最終的には少数の説明概念に仕立てようとする。その結果，第三に，Allportにあっては，特性語は特性そのものを指示していたので，特性語の検討は彼の体系において重要な位置を占めていた。これに対してCattellにあっては，特性語は，説明概念としての特性を抽象するための素材にすぎなかった。

既に述べたように彼は，特性語が人格の全領域をおおう，という趣旨の仮定をした。この仮定は，Allportが「多くの特性には名前がない」といって慎重に留保した点を大胆に踏み越えたものである。この点でCattellの方が特性語に重きをおくかにみえたが，実際にはそうでなかったことは，上述の彼の方法論から推察されるのである。

2）S. E. Asch

上述のように，AllportとCattellの見解にはかなりの相異が認められるが，人格や特性そのものを考察対象とする点では共通する。これに対して，人格や特性の知覚や認知を吟味することによって，人格に接近する方法もありうる。Asch（1946）はこの系列に属すると考えてよいだろう。この論文は他者に対する印象形成に関するものであるが，ここでは自己への印象形成も含まれるものとして考えてみたい。

Aschによれば，印象形成に関しては次の三つの考え方がある。①人はいくつかの特性をもち，その一つ一つが独立の印象価をもつ。そして，相手に与える全体印象の和である，といういわゆる要素論的立場。多くの質問紙法や評定法はこの立場に立つ。②全体印象は個々の印象の和であるが，これに加えて，正か負の方向をもつ感情的要因（affective force）が印象全体に影響を

及ぼす，という考え方。③印象形成とは個々の特性への印象の和ではなく，これらの間の統合的関係すなわち構造の知覚である，というゲシタルト理論の考え方。

Asch は③のゲシタルト的立場に立って，いくつかの実験を行なった。その一つ（実験１）は次のとおりである。すなわち，下記のような特性語７語から成るリスト２種を作り，２群の被験者に呈示した。そしてこれらの特性語で表現される人物を，文章記述と摘出表法（Check-list）で表現させた。

リストＡ：intelligent - skillful - industrious - *warm* - determined - practical - cautious

リストＢ：intelligent - skillful - industrious - *cold* - determined - practical - cautious

上記の2リストは7語中1語だけが異なるにすぎないが（*warm* vs. *cold*），印象評定の結果をみると，２リストからの印象は非常に異なるものであった。従って，各リストの印象は *warm* or *cold* が中心になって構成されていたのであり，他の特性語の印象は，中心質たる *warm* or *cold* に影響を受ける周辺質に過ぎぬ，と考えられた。

それでは *warm* or *cold* はどんな文脈にあっても全体印象を決定する中心質となるだろうか。これを確めるために次のリストが作られた（実験４）。

リストＡ：obedient - weak - shallow - *warm* - unambitious - vain

リストＢ：vain - shrewd - unscrupulous - *warm* - shallow - envious

手続は実験１と同じである。もしここでも warm が中心質の役割をもつのであれば，２リストから得られる印象は同様のものであるはずである。しかし結果をみると，２リストからは全く異なる印象が得られた上，*warm* 自体の印象価もリストＡとリストＢとでは異なっていた。すなわち，リストＡでの *warm* は消極性や無力さに近い意味となり，リストＢの *warm* はみせかけのものとみられ，不誠実さに近い意味に解釈されていた。つまりここでの *warm* は全体から影響を受ける周辺質の役割しかもたなかったわけである。なお，Wishner (1960) は，これらの実験をより洗練された技法を使って再検討している。

以上をまとめれば次のようになるだろう。まず，一定文脈においてその全体印象を決定する中心的特性がある。しかし，その特性はどんな文脈内でも中心的な役割をもつのではなく，他の文脈では周辺的な役割しかもたぬこともある。つまり，個々の特性が各々独立の印象価をもつのではなく，特性間の関係のしかたが個々の特性の印象価を規定する。

Asch の主張は大略以上のようであるが，これをみて感じられる疑問点を次に記そう。まず，知覚のゲシタルトにおいては，図と地の分離にしろまとまりの知覚にしろ，これを規定する刺激内要因（閉鎖領域，近接の要因，よい連続の要因，など）が特定されている。これに対し，Asch の実験においては，*warm* を中心質にしたり周辺質にしたりする要因が何かということが必ずしも明らかにされていない。次に，彼のゲシタルト的立場は，実験の具体的展開においては，感情要因を加味した要素論的立場から，十分に区別されていないように思われる。

最後に，Asch を Allport と比較してみよう。次に述べるはじめの2点は共通点，あとの2点は相異点である。第一に，Allport は個々人にはそれぞれ focal disposition があると考えた。Asch もまた，全体に影響を与える central quality に注目した。第二に，Allport は特性語の類義性を認めなかった。Asch においては，特性語の類義性はそれが置かれた文脈によって決まるもので，それを離れては類義性は決められない，と考えられるであろう。第三に，このような主張は，Allport においては個々人の独自性を強調する観点からなされるのに対して，Asch においてはむしろ知覚対象の統合性を強調する観点による。第四に，Allport は特性語の研究が実りのあるものと考えたが，しかし，彼においては，結局のところ特性語は特性という対象を表現する記号にすぎなかった。これに対して，Asch が問題とするのは，特性語が現に意味するところのものであって，その背後に特性という実体を想定していない。つまり，特性という対象そのものの枠組として特性語を考える Allport に対して，Asch は，人格や特性を認知する枠組として特性語を位置づけているように思われる。

3）最近の考え方

ここでは，人格測定における意味的要因の存在を強調する立場を紹介する。

Mulaik (1964) は 76 対の特性評定尺度（意味微分形式の尺度）を準備し，これらの尺度上で，或る被験者群には現実の人物（被験者の知人など）を評定させ，別の群には特性語を評定させた。この評定結果を因子分析すると，現実人物評定の因子構造と，特性語評定の因子構造との間にはかなりの一致がみられた。このことから，現実人物の評定の解析の結果得られる人格要因（personal factors）の中には，人格外の要因 すなわち言葉のもつ概念要因（conceptual factors）が含まれている，と考察された。

Loehlin (1961) は，意味微分法，類似性評定，および Role Title Test なる方法を使って，特性語数語と自己を評定させた。評定結果から，自己と特性語の間の距離と特性語相互の距離を，方法毎，被験者毎に算出した。そしてこれにやや複雑な操作を加えた結果，大略次のような知見を得た。すなわち，自己と特性語の間の距離判断は個人によって異なる。この差異を各個人のもつ自己像の差異とみなせなくはない。ところが，この差異に対応して，特性語相互の距離判断に差異があることがわかった。たとえば，自分を *solemm* だと判断した個人は，*solemn* が *expressive* や *considerable* に近いと判断する。他方，自分を *solemn* でないと判断する個人は，*solemn* が *submissive* や *obstructive* に近いと判断する傾向がみとめられた。従って，自己ないしは自己像の差異とみなされてきたものの中には，実は個々人が特性語に与える意味づけの差異が含まれている，と考察された。なお，Loehlin (1967) はこれよりさらに工夫された実験で，上記の結論を再確認している。

論文の紹介は以上であるが，この種の研究はまだ他に多くあると思われるし，それらが全体としてどのような方向に議論を展開しているのかは不明である。ただ，上記の報告だけから敢えて推察すれば次のようになる。すなわち，この種の研究には，特性語の対象指示機能に一定の限界を見出そうとする傾向がある。そして，特性ないしは人格という対象要因の代りに，特性語の意味要因を強調する。しかし，意味的要因の操作的定義は一義的にされて

いない。たとえば，Mulaik における意味は C. E. Osgood 系統の意味微分的技法によって規定されるもので，個人差を捨象した外的な意味といえよう。これに対して，Loehlin における意味は個々人の中にある内的な意味とみなされている。そしてこの背景には G. A. Kelly の personal constructs の理論があるようである。

3．ACL に向っての予備的考察

1）ACL の特異性

ここでは，特性語を項目とするために ACL に生じると思われる特異性を，主に人格質問紙と比較して論じる。

①特性語の不足から生じる ACL の限界：「名前のない特性は沢山ある」という Allport and Odbert の言葉は，特性語による人格記述の限界を認めた妥当な見解である。特性語の網の目から抜け落ちた人格側面は沢山あり，その中には重要な人格側面も含まれているだろう。たとえば精神分析学者 Jung のいうアニムスとアニマの共存性と相補性を適切に表現する日常語はないのである。この点で，「importance, interest, utility のいずれかの条件を満たす人格側面は既に言語の中に登録されている」という Cattell の仮定は妥当とはいえない。従って，特性語を用いる ACL がすべての人格側面を測定できないことは明らかである。

上記のことを具体的に考えてみよう。たとえば，多くの場合「人なつっこい」人物や，「つっけんどん」な人物を ACL によって特徴づけることは簡単であろう。何故なら，それぞれの特性語が ACL 全体空間において占める位置にその人物を位置づければよいからである。これに対して，「人なつっこい」と「つっけんどん」という対立的な二つの傾向を兼備し，これといった外的条件もなしにこの二つの傾向が交替して現れる人物の場合はどうであろうか。この人物は両方の特性語にチェックするか，そうでなければ両方にチェックをしないであろう。そのいずれの場合でもこの人物は ACL 空間の原点近辺に位置づけられてしまい，人なつっこくもなく，つっけんどんでもない普

通の人物と区別できなくなってしまうのである。つまり，この人物をこのような特性語で特徴づけることはできず，「気分屋」とか「気まぐれ」という特性語を項目として採用することによって辛うじて特徴づけられるのである。裏を返せば，もしこれらの単語がなければ，ACL はこの人物の性格を特徴づけることができないということである。

これに対して，文章表現を項目とする人格質問紙には，ACL にあるような欠陥はない。文章を使えばほとんど無限の表現様式がありうるので，これを項目とする人格質問紙は人格の全側面を測定できる可能性をもつ。もっとも，現実の人格質問紙は人格の全側面にわたるものではなく，一定の人格理論において重要と考えられている人格側面についての項目を準備することが多いようである。たとえば，MPI は H. J. Eysenck の人格理論で重要とみなされている人格側面に関する質問紙であるし，MMPI は精神病理学で重要とみなされる人格側面に関する質問紙である。こうして，人格理論の多様性に応じて，人格質問紙も多様に作成されることになる。

②認知枠としての特性語：Allport は特性という人格単位の必要性を認め，反特性論はこれを認めなかった。この論争においては，特性の存在，或いはその存在を想定する必要性が問題となった。このような文脈においては，特性語を項目とする ACL の意義は，特性という人格単位の存在の有無に依存する。つまり，特性が存在しなければ，特性語を項目とする ACL は無意味なものとなるわけである。

これに対してもっと別の考え方もありえよう。つまり，特性の存在については確かに議論の余地があるが，特性語の存在はほぼ自明の事実なのである。たとえば，「正直」な人物や行動が存在するかどうかは不明である。しかし「正直」という言葉は存在する。このような特性語を，存在の不確かな特性を表わす枠組とみなすのではなく，自己及び他者の人格を認知する枠組として位置づけることもできよう。

ただし，人格認知が特性語を枠組にしてなされるといえる根拠はない。というのは，認知は表情や言語などの表現手段を介してはじめて外在化される

ものであるが，本来あくまで心の内的現象なのであって，その様式が表現手段の形式と同じものかどうかはわからないからである。この点を厳密に考えるなら，自己及び他者の人格を表現する枠組として特性語を位置づけるのが適当かもしれない。「A君は正直だ」とか「B君はまじめだ」といった表現に，私達は日常接することが非常に多い。この点において，特性語が表現枠として存在するといえる明白な根拠がある。

特性語のこのような位置づけの利点は，評価性のような人格外要因が特性語の中に含まれることを簡単に容認できるということにある。つまり，Allport のように特性語を対象枠とみた場合は，その中に対象外要因を含めるわけにはいかない。これに対し，認知や表現の枠とみなした場合は，特性語の中に，よいか悪いかの評価判断が含まれるのはむしろ自然なこととみなせるのである。たとえば，「正直」という特性語は正直という特性を記述すると同時に，それが良いものだという評価判断を含むといえよう。一つの単語の中に記述と評価という異なる二要因が含まれるのは，おそらく両者が相関的であるからであろう。つまり，正直が多くの場合良いのであれば，両者を別々に表現せず，単一の単語ですませるのが表現の節約になるからである。

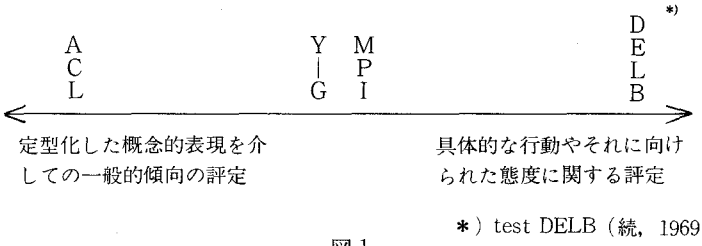
Asch によれば，特性認知の説明には，要素論とゲシタルト論の他に，その両者の中間型態として，個々の特性の認知と共に，認知の全体方向を決める affective force の存在を認める立場があるという。評価性を含む特性語を項目とする ACL はこの考え方に近いテスト法といえよう。

これに対して，人格質問紙は文章表現のしかた次第で，評価性を除去しようとすることができる。現に多くの人格質問紙は，評価的に中性と思われる項目から成り立っている。それによってもなお評価性を除去できない場合は，評価性と相関する部分を原データから統計的に除去する技法も工夫されている（肥田野，1971)。この技法は ACL にも適用できないわけではないが，しかし，評価性が特性語の重要な構成要素であることを考えれば，その適用には消極的であるべきであろうと思われる。

③ ACL の測定水準：測定水準によって ACL を他の質問紙と比較すれば，

図1のようになる。この図によれば，ACL は DELB の対極に位置する。なお，DELB はのちに CDPA という質問紙に発展するもので，評定結果をその反応パターンによって解釈するという点で独創的な人格検査として知られているが，項目の内容についても，具体的行動の水準での質問項目を作るという点を，従来の人格質問紙よりもさらに徹底させたという意味で注目すべき質問紙である。一方，ACL は具体的な行動には言及せず，これより抽象的な水準すなわち Allport のいう特性の水準で質問項目を作るのである。なお，よく知られた他の質問紙（MPI, Y-G）は，この両者の中間に位置にあるともいえるし，両者の特徴を兼備するともいえよう。

上記の分類を利き手の測定にたとえてみよう。DELB ならば，「どちらの手で字を書くか」，「どちらの手で球を投げるか」と質問するであろう。これに対して ACL ならば，「どちらの手が利き手か」と質問する。つまり ACL は，現実の諸行動の背後にあると想定される一般的傾向を表わす概念に直接訴えるのである。



*）test DELB（続，1969）

図1.

2）ACL 作成の諸方法

①項目の収集法：これを大別すれば次の二つに分けられる。その一つは，特性語の条件を予め定めておき，これを満たす単語を辞書から取出す方法である。この代表例としては Allport and Odbert の研究が挙げられる。彼等はウェブスター辞典から広義の特性語を約 18,000 語取出した。日本語では，古浦（1952）*が大日本国語辞典から約 6,500 語，青木（1971）が明解国語辞典から約 4,000 語の広義の特性語を取出している。なお，Allport and Odbert によ

れば，彼等以前にもこの種の試みが英語やドイツ語においてかなりなされているようである。

もう一つの方法は，普通人の記憶を辞書とみなして，この中から特性語を取出していく方法である。この方法には，被験者が男性か女性か，高年者か若年者かによって，収集される特性語の種類がちがってくるという難点があるが，当該被験者の母集団の中でみる限り，有用な特性語を取出せるという長所もある。さて，この方法に属するものはいくつかある。その第一は，連想法による収集である。長嶋ら(1965, 1966)は，400人の大学生に刺激語(「小さいころの私」,「私の家庭」,……)を呈示し，これから連想される形容詞を書かせた。その結果，約900語，延べにして約11,000語の形容詞を取出した。ただし，この方法の性格上，収集された形容詞は特性語だけではなく，感情表現語も含まれているようである。

第二には,「知っている性格表現用語をできるだけ沢山書いてください」という教示を被験者に与える方法がある。これによれば延べ語数では多くの特性語をとりだすことができるが，その反面，使用頻度や熟知度の高い特性語のみが抽出され，性格の多側面にわたっての収集がしにくいという心配がある。なお，この方法を使った研究を見出すことはできなかった。

第三には,「自分の性格を単語で表わしてください」という教示を用いる方法がある。この方法の長所は，被験者の性格の多様性に対応して多様な特性語を集められることにある。ただ，表現対象が自己であるために生じる次のような欠点もある。すなわち，他人の性格に対してはひんぱんに適用されるが，自分の性格に対してはあまり適用されない特性語，たとえば負の評価性を帯びる特性語はこの方法によっては取出しにくい。なお，本稿は主としてこの方法を採用した。

② ACLの分析法 —— 特性語の分類 ——：これを大別すれば，特性語の意

＊ 古浦一郎 1952 特性名辞の研究．古賀先生還暦記念心理学論文集（広島大学）．—— 青木（1971）より引用 ——

味そのものによって分類する方法と，自己評定を介して分類する方法とがある。まず前者には次の二種がある。その第一は，日常生活で行なわれている単語の使い分けにみられる分類法である。たとえば，「彼はまじめだが決断力に欠ける」という表現には，既に特性語の分類が含まれている。この方法は計量化手順の欠如という点で原始的であるともいえる。しかし，代表的な計量的技法である因子分析でも，最後に行われる因子解釈ではこの直観的な意味分類にほぼ全面的に依存せねばならないという意味で，これは最終的な方法であるとも考えられる。

その第二は，特性語の意味分類を上記のように直観的にではなく，経験的に行う方法である。この際の教示は「二語の意味はどれほど近いか」のように意味の直接判断をもとめるやり方と，「二語の意味する特性を同一人物が兼備することがあるか」のように仮想的人物を想定するやり方がある。これを用いた研究としては，Thurstone (1934) が因子分析によって特性語を分類したのが最初であろう。さらに近年は，多次元解析法の発展に伴って，この種の分析が非常に多くなっている。

さて後者の方法は自己評定を介した特性語分類である。特性語を使って性格分析を行おうとするのであれば，その場面での項目分析は欠かせない手順であろう。これには次の二つの方法がある。その第一は，特性語を予め直観的に分類して数個の尺度にまとめておき，これを他の人格質問紙と併用して，各尺度の妥当性を確める方法である。Gough and Heilbrunはこの方法を用いている。ただ，ここでの測定単位は尺度であって，これを構成する個々の特性語の役割は明らかにならない。

この点に着目するのが第二の方法である。Parker and Veldman (1969) は，Gough and Heilbrun の ACL を構成する 300 語を約 5,000 人の男女大学生に呈示し，自己評定させた。そして特性語間のファイ係数を算出し，これに因子分析を適用して，7 個の因子を抽出した。なお，この技法は人格質問紙の項目分析にも使われる方法であり，たとえばMPI 日本版はほぼこれと同じ手続によって，項目をE尺度とN尺度とに分類している。

本稿の項目分析は大筋において，この第二の方法に属する方法によって行う。ただし，因子分析ではなく，数量化３類もしくはパタン分類法と呼ばれる方法（林，1973）を用いる。

③採点方法：一般的採点法は，どの項目にも均等な配点をするやり方である。たとえば，項目分析の結果，「明るい」，「社交的」が外向性次元に属する項目であることがわかれば，そのどちらの項目にチェックした被験者にも外向性得点１点を与える方法である。もう一つの方法は項目によって重みを変えるやり方である。たとえば「社交的」にチェックすれば２点，「明るい」にチェックすれば１点の外向性得点を被験者に与えるのである。本稿は，後者の重みづけ採点法を使った。

4．ACL の作成と適用

1）ACL の作製

①特性語の収集：「あなたは日頃自分の性格をどのように考えていますか。あなた自身の性格を，７つの単語を使って（たとえば，〝活発な〟とか〝おとなしい〟のように）要領よく形容してください。」という教示の下で，，室蘭工業大学昭和 50 年度新入学生 494 名（うち女子５名）が自己記述した。又これと同時に次の二つの教示の下に同じ学生が記述を行なった。すなわち，「あなたの知人（友人，隣人，親戚など）のうちで，日頃あなたが好意をもっている人を１人だけ思い浮べて，その人の性格を５つの単語で形容してください」（好きな人の記述）と，「あなたの知人のうちであなたが好意をもてない人を１人だけ思い浮べて，その人の性格を５つの単語で形容してください。」（嫌いな人の記述）である。実施時期は昭和 50 年４月であった。

対象者 494 名のうち無記入者は，自己記述で 45 名，好きな人の記述で 47 名，嫌いな人の記述で 66 名であった。収集された特性語の延べ語数は，自己記述では 2,119 語，好きな人の記述では 1,578 語，嫌いな人の記述では 1,382 語であった。

次に，特性語の同定基準として大略次のような基準をとった。すなわち，

語尾に若干のちがいがあっても意味がちがわないと思われる場合には1つの単語と認めるが，意味に多少ともちがいがあると思われる場合には異なる語として認めた。たとえば，「落ちついた」，「落ちついている」，「落ちつきがある」は同一の特性語とし，「気が弱い」と「弱気」は別の特性語と認めた。ただ，この点はきわめて微妙であって，十分な区別ができたとはいい難いのであるが，原則として，記述された字句どおりの形を残そうとした。こうして，自己記述では439語，好きな人の記述では347語，嫌いな人の記述では400語の特性語を得た。自己記述の特性語とその出現頻度は，付表2に示した。

② ACLの作製：自己記述において出現頻度6以上の特性語はほぼ全部，頻度5の特性語は部分的に，ACLの項目として採用した。ただし，頻度6以上あっても，否定辞を伴う特性語で，否定辞のない形の方が出現頻度の高い特性語（「落ちつきがない」，「不まじめ」，「非社交的」，……）は除外した。こうして自己記述から70語の特性語がACL項目として採用された。次に，好きな人の記述から頻度10以上で，自己記述と重複しない特性語を4語採用した。さらに，嫌いな人の記述から頻度10以上の特性語を18語採用した。最後に，筆者が以前に特性語の意味分析に用いたことのある13語を採用した（田中，1974，1975）。以上の計105語の特性語のリストが本稿のACLである。これは表1に示すとおりである。

表 1. ACL

1. 明るい	16. キザな	31. 重厚な	46. 内向的	61. あきっぽい	76. 計画的	91. 単純
2. 意地っぱり	17. 機敏な	32. 消極的	47. のんき	62. いじわる	77. 怪率	92. 冷たい
3. 陰気	18. 気分屋	33. 小心な	48. 恥ずかしがり	63. うそつき	78. ごうまん	93. てれや
4. 内気	19. 協調的	34. 慎重な	49. ひかえ目	64. うるさい	79. 自主的	94. なまいき
5. おおらか	20. 口べた	35. 図々しい	50. ほがらか	65. おしゃべり	80. 静かな	95. 熱中する
6. 臆病な	21. 軽薄な	36. すなお	51. 見栄っぱり	66. おっちょこちょい	81. しつこい	96. のんびり
7. 怒りっぽい	22. 堅実な	37. 責任感が強い	52. 無鉄砲な	67. お人よし	82. 社交的	97. はにかみ
8. 落着きのある	23. 強引な	38. 積極的	53. 明朗	68. おもしろい	83. 正直	98. 悲観的
9. おとなしい	24. 行動的	39. そそっかしい	54. 勇敢な	69. 活動的	84. 神経質	99. ひっこみ思案
10. 思いやりのある	25. 高慢	40. 大胆な	55. 陽気	70. 頑固	85. 親切	100. まじめ
11. 温和	26. こり性	41. 短気	56. 弱気	71. 寛大	86. 心配性	101. 無口
12. 活発	27. 根気強い	42. 知的	57. 楽天的	72. 気が小さい	87. ずるい	102. 面倒くさがり
13. 感情的	28. 自己中心的	43. でしゃばり	58. 利己的	73. きちょうめん	88. 誠実	103. やさしい
14. 頑張り屋	29. 自尊心の強い	44. 努力家	59. 冷静	74. きどる	89. せっかち	104. ユーモアのある
15. 気が長い	30. 自分勝手	45. 鈍重な	60. わがまま	75. 暗い	90. だらしない	105. 楽観的

2）ACLの適用

表1に示したACLを昭和51年度室蘭工業大学新入学生497名に配布して，次のような教示の下で自己評定をもとめた：「下記の単語は人の性格を表現するときによく使われるものです。番号順によく見て，あなたの性格に近い単語の番号に○印をつけてください。」実施時期は昭和51年4月であった。その結果，無記入者5名，女子5名を除く男子487名の資料を得，これを以下の分析の対象とした。

3）ACLの分析（田中，1976）

①項目出現率：各項目に大学生がどの程度チェックしたかを表わす項目出現率の詳細は付表1に示した。これによれば，出現率の高い項目は，

明るい（45%），口べた（44%），てれや（44%），恥ずかしがり（39%）
内気（38%），おとなしい（37%）

などであった。一方，出現率の低い項目は，

いじわる（1%），ごうまん（1%），鈍重な（1%），キザな（1%），
高慢な（1%），重厚な（1%），冷たい（2%）

などであった。項目出現率の中央値は16%，四分偏差は9.5であった。

②解析：上記の結果を数量化Ⅲ類あるいはパタン分類法といわれる方法（林，1973などを参照）によって解析した*。この方法は，アイテムとサンプルの間の相関を最大にするように，ここでは特性語と大学生の間の相関を最大にするように，各特性語と各大学生に同時に値を与える方法である。従ってこの方法を使えば，特性語の分析と同時に大学の性格分類も実行されるわけである。計算は4次元まで行われ，その固有値は大きい方から，0.2568，0.2043，0.1320，0.1140であった。その結果得られた特性語の各次元上での尺度値は付表1に示すとおりである。なお一定次元での特性語jの値x_jは，

$$\sum_{j=1}^{105} d_j x_j / l_n = 0, \quad \sum_{j=1}^{105} d_j x_j^2 / l_n = 1$$

* この計算と以下に示す計算のほとんどは，室蘭工業大学情報処理教育センターのFACOM 230−28を使って行われた。

となるように基準化されている。ここで，d_j は特性語 j の出現頻度を表わし，ln は総頻度を表わす。

③ ACL の解釈基準の設定：こうして得られた ACL 空間の次元構成を解釈する基準を設けるために，次のような評定を実施した。すなわち，大学生と同年代の室蘭市内高等看護学院新入学生女子 25 名に，上記の特性語 105 語を呈示し，次の教示の下で評定を要請した：「この用紙には，私達が人の性格を表現するのによく使うことばを並べてあります。このことばの１つ１つをよく見て，そのことばが〝好ましい性格〟を意味していれば，大きい数字を，〝好ましくない性格〟を意味していれば，小さい数字を，それぞれの（　）に記入してください。ただしその場合に使える数字は **1**，**2**，**3**，**4**，**5** だけですから注意してください。」そしてこの４週間後に，同じ評定者に同じ特性語を呈示し，「そのことばが〝外向性な性格〟を意味していれば大きい数字を，〝内向的な性格〟を意味すれば小さい数字を記入するように」教示した。

これら二種の評定結果のそれぞれに最適尺度法（西里，1975）を適用して第一次元を計算した。その結果，〝好ましさ〟の第一固有値は 0.8058，〝外向—内向〟は 0.5196 であった。なおこの固有値は，評定尺度のカテゴリーと特性語の間の相関比の自乗を意味する。従って，両固有値が十分大きいことは，各評定尺度上で特性語が十分弁別的な値をとりえたことを示している。そして，その傾向は〝好ましさ〟評定尺度上でより大であった。こうして得られた評定尺度の５段階カテゴリー（**1**，**2**，**3**，**4**，**5**）の間隔は図２に示し，これらの尺度上での特性語の値（この値は ACL 尺度値と同様に基準化されている）は付表１に，その度数分布は図３に示した。図２をみると，形式上は５段階カテゴリーであるが，心理的には **1** と **2**，**3**，**4** と **5** の３段階のカテゴリーになっていることがわかる。そしてこの傾向は〝好ましさ〟評定尺度において著しい。すなわち事実上，〝好ましくない〟，〝どちらでもない〟，〝好ましい〟の３つのカテゴリーとなる。次に図３をみると，〝好ましさ〟尺度上で特性語の値は両極にモードをもつ双峰性分布を示すのに対し，〝外向—内向〟尺度上では中間的なカテゴリーにモードをもつ分布を示す。すなわち，

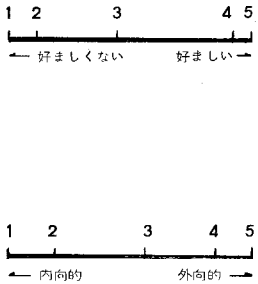


図2．評定尺度のカテゴリー間隔

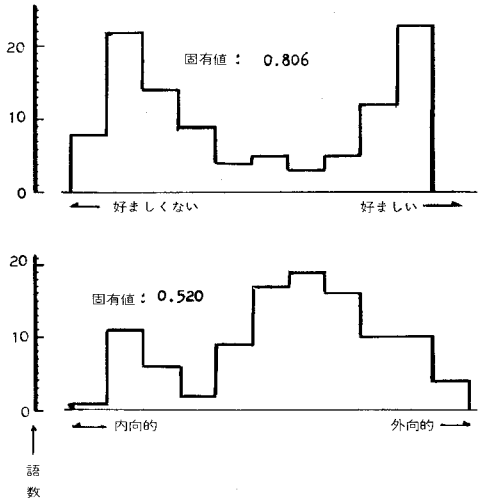


図3．各尺度上の特性語の度数分布

特性語の大半は〝好ましい〟か〝好ましくない〟かいずれかの意味をもち，そのどちらでもない評価的に中性の特性語は少ない。これに対して，〝外向—内向〟上ではそのどちらともいえない中性の特性語が最も多い。

④ ACL の次元構成：各特性語の〝好ましさ〟の値と〝外向性〟の値を，大学生の自己評定による ACL 空間の客観的解釈のための外部基準とする。各特性語の評定尺度値と，ACL 各次元上の座標値の間の相関を計算した。これは表2に示した。なお1％の危険率で有意水準に達するには 0.25 以上の相関が必要であるが，これを満たすものは太字で示した。まず，ACL の出現率は〝好ましさ〟に有意な相関をもつ。これは，項目の承認率（出現率）は項目の評価性と関連が深いという従来の知見に対応する結果である。次に ACL の次元構成について述べる。ACL 第1次元は〝好ましさ〟に対して有意な相関（r=0.38）をもつが，〝外向性〟に対して非常に高い相関（r=0.89）をもつ。第2次元は〝好ましさ〟に対して非常に高い相関（r=0.84）をもつ。第3，第4次元は評定尺度との間に有意な相関はもたなかった。以上のことを2次元平面に図示すれば図4のようになる。この図を見れば，〝外向性〟尺度

表2． ＡＣＬと評尺度の相関（n＝105語）

ＡＣＬ ＼ 評定尺度	出現率	次元 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
〝好ましさ〟	**0.37**	**0.38**	**0.84**	−0.16	−0.20
〝外 向 性〟	−0.09	**0.89**	0.10	0.08	−0.08

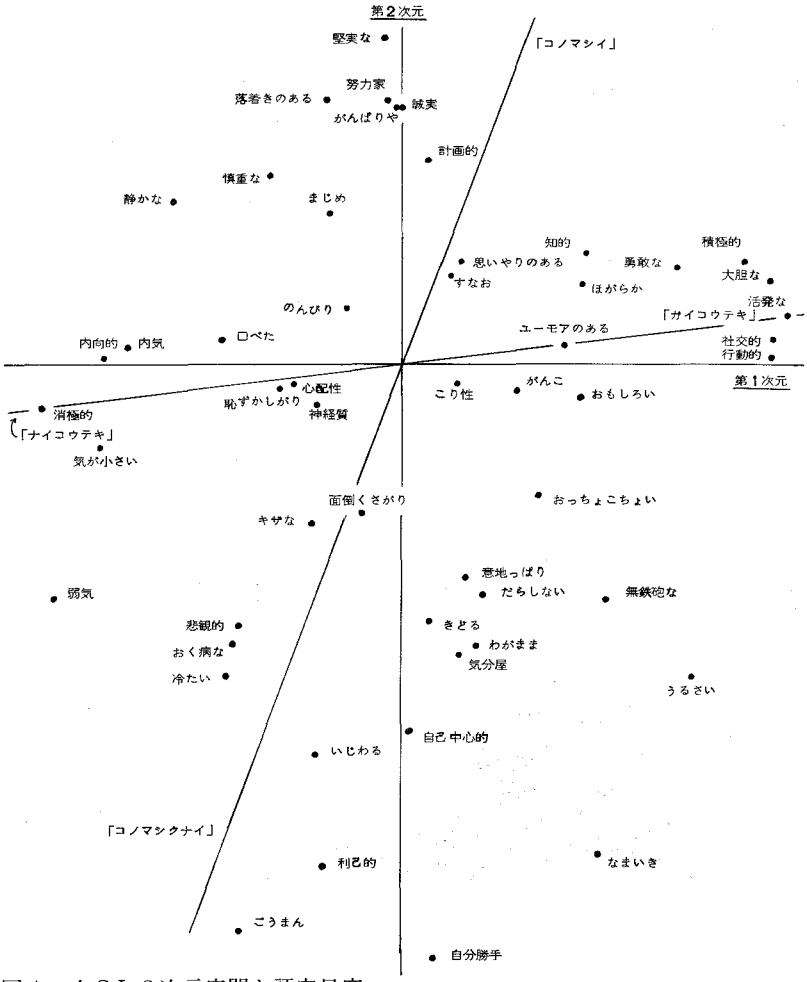


図4．ＡＣＬ２次元空間と評定尺度

はACL第1次元にほぼ沿っており，〝好ましさ〟尺度はACL第2次元にかなり近い。このことから，ACL第1次元は外向性を，第2次元は好ましさを表わすものと解釈した。ただ，〝好ましさ〟は第1次元への相関も有意なので，第2次元の解釈は第1次元ほど確実とはいえない。なお，〝外向性〟と〝好ましさ〟の間には0.46の相関があった。なお，図4に示した特性語は，紙面の都合で105語から無作為に取出した52語のみである。

ACLの第3次元以降は評定尺度によっては解釈できないので，次のような手順でその意味を推察する。まず，ACL第3次元で座標値の大きい特性語は，

頑張り屋（2.15），根気強い（2.35），自己中心的（2.32），自分勝手（2.52），利己的（2.98），きちょうめん（2.02）

などであった。一方，座標値の小さい特性語は，次の語などであった。

おおらかな（−1.07），のんき（−1.59），明朗（−1.22），陽気（−1.04），楽天的（−1.23），おしゃべり（−1.10），だらしない（−1.30），のんびり（−1.37）

従って，ACL第3次元は緊張度をあらわす次元ではないかと推察された。なお，第4次元についてもこれと同様の解釈を試みたが，解釈は困難であった。

4）ACLによる性格分類 —— 人格質問紙との比較 ——（田中，1977）

既に述べたように，ACLの自己評定結果に数量化Ⅲ類を適用すれば，アイ

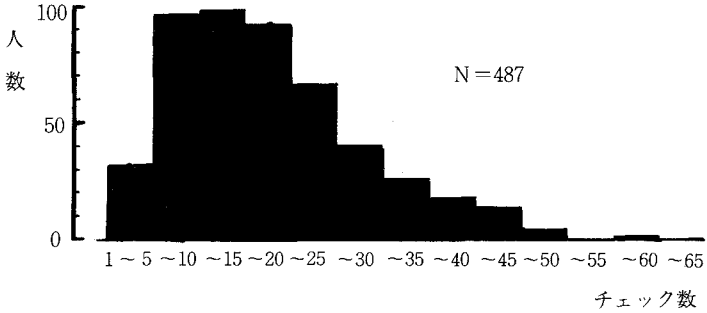


図5．ACLへのチェック数の分布

表3． ＭＰＩとＡＣＬの相関（N=253）

ＭＰＩ ＼ ＡＣＬ		チェック数	次元 Ⅰ（〝外向性〟）	Ⅱ（〝好ましさ〟）	Ⅲ（緊張度）	Ⅳ（不　明）
尺度	Ｅ（外向性）	−0.11	**0.60**	0.06	−0.05	0.01
	Ｎ（神経症）	**0.22**	**−0.22**	**−0.27**	**0.17**	−0.14
	Ｌ（虚　偽）	−0.09	0.03	**0.24**	−0.08	0.04
「？」数		−0.02	−0.15	−0.07	0.09	0.01

テムとしての特性語の値と同時に，サンプルとしての大学生の値も決定される。つまり，先の分析において既に大学生の１人１人に数値が与えられているのである。ここではこの数値を，ACL にあらわれる各個人の性格特徴とみなすことにする。

①チェック数：各学生が ACL でチェックした数をあらわす。図５はその分布を示したものである。全学生の 90％はチェック数 30 以内である。

② MPI との比較： ACL の妥当性を確めるために，同じ大学生に対して MPI を実施した。実施時期は昭和 51 年６月と９月であった。その結果 253 名の資料を得た。そして，MPI 下位得点（Ｅ尺度，Ｎ尺度，Ｌ尺度，「？」数）と ACL 次元得点の間の相関をもとめたのが表３である。太字で示したのは１％水準で有意な相関である。この中に特に注目されるのは，ACL 第一次元と MPI のＥ尺度の間に高い相関(0.60)がみられることである。辞義的な面からみれば当然でもあるが，両法の成立事情の相異を考えれば，むしろ異様な結果ともいうべきものである。この他にも有意な相関はあるが，それほど高いものではなかった。

③Ｙ−Ｇとの比較：同じ大学生に対してＹ−Ｇ性格検査を実施した。実施時期は MPI と同じである。その結果，103 名の資料を得た。なお，Ｙ−Ｇには 12 尺度があるが，この各々について相関をもとめるのはやや煩雑になるように思われるので，ここでは最終的な性格類型の判定に直接関連のある系統値（Ｅ，Ｃ，Ａ，Ｂ，Ｄ）をＹ−Ｇの下位得点とみなし，これらに対する ACL

表4． Y－GとACLの相関（N=103）

ACL / Y－G		チェック数	次元 I（〝外向性〞）	II（〝好ましさ〞）	III（緊張度）	IV（不 明）
系統値	E（不安定消極）	**0.31**	**−0.44**	−0.13	0.08	−0.18
	C（安定消極）	−0.09	−0.15	0.17	−0.16	**0.25**
	A（中 間）	−0.08	−0.17	−0.04	0.08	−0.19
	B（不安定積極）	0.16	**0.32**	−0.10	0.09	−0.04
	D（安定積極）	−0.22	**0.53**	0.16	−0.14	**0.31**

次元得点をもとめたのが表4である。太字は1％水準で有意な相関である。このうちでは，ACL第一次元がY-GのD系統値に正の相関を，E系統値に負の相関を示すのが注目される。また，解釈困難であったACL第4次元は，MPIに対しては有意な相関はなかったが，Y-Gに対しては，CとD系統（情緒安定傾向）に正の相関があるのは興味深い。

5）考察

①項目の出現率と評価性：人格質問紙では，被験者のチェックした項目を尺度ごとに加算して，その被験者の性格得点を算定することが多い。もし或る尺度の中に出現率が異常に高い或いは低い項目だけが含まれるとすれば，その尺度得点は項目出現率という人格外要因を反映するにすぎないということも考えられる。それではこの項目出現率の規定要因は何か。Edwards(1970)によれば，人格質問紙の項目出現率が，当該項目の社会的望ましさ（social desirability），すなわちここでいう評価性と高い相関があり，さらにACLにおいても両者の間には0.92という極度に高い相関がみられたという。

本稿の結果ではこの両者の相関は0.37であった。これは統計的に有意ではあるが，Edwardsほど極端なものではなかった。むしろ個々の項目をみれば，高出現率の項目の中には，「口べた」とか「神経質」のように負の評価語も含まれるし，低出現率の項目の中には「重厚な」とか「勇敢な」という正の評価語も含まれていた。このことから，項目出現率に影響を及ぼすのは項目の

評価性だけではなく，その使用頻度や熟知性も関与するのではないかと思われた。

② ACL の次元構成と項目の評価性：ACL 項目である特性語を「好ましさ」尺度上で評定すると，特性語の大半は「好ましい」か「好ましくない」かいずれかの評価性をもつことが知られた。この結果は Anderson や Hofstee の結果と調和する。

Edwards は，特性語のこのような評価性要因が ACL の自己評定の因子構造にも影響を与えることを示唆した。すなわち，彼は特性語 90 語を項目とする ACL を約 300 名の男女大学生に配布し，この上で自己評定を行わせた結果を因子分析すると，その第一因子（未回転）での項目の因子負荷量が各項目の社会的望ましさの値に対して 0.90 の相関があることを見出した。つまり，ACL の因子構造の最大の規定要因は項目の評価性であったわけである。

これに対して本稿では，ACL 第一次元は「外向性」に対して 0.89 の相関をもち，評価性要因（「好ましさ」）はむしろ第二次元に 0.84 の相関を示す。つまり本稿では，評価性要因は ACL 次元構造の第二の規定要因としてあらわれたわけである。このような結果の相異の原因としては，特性語の収集法や ACL の実施法や解析法の相異などが考えられるが，今のところどれと特定はできない。ただ，本稿の各次元の固有値の大きさをみると，第一と第二の固有値が共に大きく，この二つと第三固有値の間にやや差があることがわかる。このことから，第一と第二次元は拮抗する次元であって，わずかの手順のちがいで両者の相対的強度が交替することもありうると考えられる。こう考えれば Edwards と本稿の結果にはそれほどのくいちがいはないともいえるであろう。

しかしながら本稿の ACL 次元構成では，評価性は二番目の重要性しか持たなかったことは事実である。このことは，ACL の項目の大半が意味的には明瞭な正もしくは負の評価性を帯びるにもかかわらず，その意味要因は自己評定の次元構成の第一の決定因にはなっていないという点で興味深いのである。

なお，Peabody (1967) は特性語の意味を多次元解析して，評価性が特性語の重要な意味側面とはいえぬという，或る意味では本稿の結果と調和する結果を導出した。これに対して Rosenberg and Olshan (1970) は，特性語の意味の多次元空間に対する「よい－悪い」の評定尺度の重相関はきわめて高く，従って，評価性は依然として強力な意味要因だと反論した。このように Rosenberg and Olshan は，意味空間の解釈基準としてこの空間に対する一定評定尺度の重相関を採用しているが，重相関という解釈基準を採用する際には若干の注意が必要であろう。

たしかに本稿においても，二次元までで既に空間に対する重相関は評価性（「好ましさ」）($R=0.92$) の方が「外向性」($R=0.90$) 尺度を上まわっており，この傾向は次元が増加するにつれ強まる。これに対して「外向性」は ACL 第一次元に対して高い単純相関があるが，その後次元が増えても重相関はほとんど増加しない。つまり，「外向性」は多次元空間内の特定の単一次元にのみ高い相関があるという意味で，分析的な尺度だといえよう。他方，「好ましさ」という評価尺度はどの次元に対しても多少とも相関があるという意味で，浸透的な尺度であるといえよう。この点において，重相関係数という測度は，意味の分析的な側面よりも浸透的な側面を強調する測度となる。本稿の ACL 次元構成の最大規定要因となるのは，重相関を測度としてみれば「好ましさ」であり，単純相関を測度とすれば，「外向性」なのである。

③ ACL 第一次元としての「外向性」：本稿の ACL 第一次元は，「外向的—内向的」という日常語の評定尺度に対して 0.89 という高い相関があった。このことから ACL 第一次元は外向性をあらわす次元だと解釈された。

ところで，外向性あるいは内向性という人格次元は心理学では古くから問題とされているものであり，その代表的なものとしては，C. G. Jung の向性理論や，MPI を作製した H. J. Eysenck の向性理論などがある。「外向性」が第一次元として取出された本稿の結果は，このような理論と一見調和するようにも思われる。しかし，Jung や Eysenck における向性の概念は，人間の様々の意識や行動を説明するために，特別の意味を含められた理論的概念で

ある。これに対して本稿の向性はあくまで常識的な記述概念にとどまるものである。つまり本稿における向性とは,「外向的—内向的」という日常語から普通人が感知する意味を指すにすぎないのである。従って本稿の結果が従来の向性理論を支持する根拠とはならないであろう。

ところが, ACL に並行して MPI を実施し, 両者の関係を検討すると, ACL の「外向性」次元と MPI の外向性尺度の間には 0.60 というかなりの相関が見いだされた。また, ACL の「外向性」は Y-G の積極—消極系統値に対しても有意な相関があった。このことは, ACL の「外向性」と諸人格質問紙の外向性とは, 上述のように概念の性質が全く異なるにもかかわらず, 実際の操作の上では同様の側面を測っていることを示している。

人格質問紙は, 重要と考えられる人格側面に焦点をあてて作成されるものである。一方 ACL は格別の理論的背景もなく, 単に人格に対する普通人の関心を基礎とする検査である。このように発生事情の異なる検査の間に, 上記のような結果の対応がみられることは, 専門的にみて重要とされる人格側面と, 普通人が強い関心をもつ人格側面とは, 理論的にはともかくとして少なくとも操作的な水準では或る程度重複していることを示唆しているように思われる。

④ ACL 標準版作成への疑問: Gough and Heilbrun は ACL の標準版(*the* Adjective Check List) を作成した。しかしその必要はあるのだろうか。

たとえば, 世論調査が測定しようとするのは, サンプルされた人の意見ではなく, その背後にある日本人という母集団の意見である。調査の手順にまちがいがなければ, 異なる人物をサンプルしたいくつかの調査の結果は同じであるはずである。

このようなことは ACL についてもいえるであろう。すなわち, 諸家の特性語収集の研究によれば, 特性語は数千語程度の有限母集団を構成していると推定される。この母集団から一定の特性語を数回サンプルすれば, 項目の異なる数種の ACL ができあがる。本報告の ACL はこうして作られたひとつの ACL (*an* ACL) にすぎず, 他のいくつかの ACL も等しく可能である。もし,

本報告のACLの作製手順が適切であるならば，その結果は他のACLによっても得られるはずである。従って，どの特性語を使うべきかを特定する標準版作製手続はACLでは必要なものとは思われない。結局ACLにとって重要なのは項目を特定することではなく，項目の母集団を特定することであろう。項目母集団を特定すること，すなわち特性語収集は，既述のように既に何回か行われているが，さらに何回も試みる価値をもつものだと思われる。

（昭和52年5月21日受理）

文　　献

オルポート（今田恵監訳）1968　人格心理学（上，下）。誠信書房　Translated from Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality.* N. Y.: Holt.

Allport, G. W. & Odbert, H. S. 1936 Trait-names: A psycho-lexical study. *Psychol. Monog.*,**47**, Whole No. 211.

Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of 555 personality-trait words. *J. Pers. soc. Psychol.*,**9**, 272－279.

青木孝悦　1971　性格表現用語の心理辞典的研究――455語の選択，分類および望ましさの評定。心理学研究，**42**, 1－13.

Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **41**, 258－290.

Cattell, R. B. 1943 The description of personality : Basic traits resolved into clusters. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **38**, 476－606.

Edwards, A. L. 1970 *The measurement of personality by scales and inventories.* N. Y.: Holt.

Gough, H. G. & Heilbrun, A. B., Jr. 1965 *The adjective check list manual.* Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.

林知己夫（編）1973　比較日本人論――日本とハワイの調査から――。中公新書333，中央公論社。

肥田野直　1971　人格検査に及ぼす社会的望ましさの影響について。高木貞二（編）現代心理学の課題，pp.340－347. 東大出版会。

Hofstee, W. K. B. 1969 Method effects in judging the desirability of traits. *Educ. psychol. Measmnt.*, **29**, 583－604.

Loehlin, J. C. 1961 Word meanings and self-descriptions. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **62**, 28－34.

Loehlin, J. C. 1967 Word meanings and self-descriptions: A replication and extension. *J. Pers. soc. Psychol.*, **5**, 107－110.

Mulaik, S. A. 1964 Are personality factors raters' conceptual factors? *J. consult. Psychol.*, **28**, 506−511.

長嶋貞夫・他 1965, 1966 自我と適応の関係についての研究（1），（2）—— Self-Differential 作製の試み ——。東京教育大学教育学部紀要，**12**, 85−106；**13**, 59−83.

西里静彦 1975 応用心理尺度構成法。誠信書房。

Parker, G. V. C. & Veldman, D. J. 1969 Item factor structure of the adjective check list. *Educ. psychol. Measmnt.*, **29**, 605−613.

Peabody, D. 1967 Trait inferences: Evaluative and descriptive aspects. *J. Pers. soc. Psychol.*, **7**(4, Whole No. 644)

Rosenberg, S. & Olshan, K. 1970 Evaluative and descriptive aspects in personality perception. *J. Pers. soc. Psychol.*, **16**, 619−626.

田中潜次郎 1974 意味の多次元構造と形容詞の両極性。東北心理学研究，24 号，36−37。

田中潜次郎 1975 Sorting 法にもとづく多数の特性形容詞の意味分析。東北心理学研究，25 号，54−55。

田中潜次郎 1976 自己評定による特性用語の分析 —— 特性用語の記述性と評価性 ——。日本心理学会第 40 回大会発表論文集，935−936。

田中潜次郎 1977 特性語リストによる性格分類の試み。日本心理学会第 41 回大会発表論文集，946−947。

Thurstone, L. L. 1934 The vectors of mind. *Psychol. Rev.*, **41**, 1−32.

続 有恒（編著）1969 臨床的性格適応診断。金子書房。

Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol formation: An organismic-developmental approach to language and the expression of thought.* N. Y.: Wiley. 柿崎祐一（監訳）1974 シンボルの形成。ミネルヴァ書房。

Wishner, J. 1960 Reanalysis of "Impressions of personality". *Psychol. Rev.*, **67**, 96−112.

追記：本稿で比較的詳細に論じた Allport and Odbert の論文について，日常言語学派哲学の影響を受けたと思われる心理学者 Bromley が，最近の著書の中で一章を設けて，理論的な検討を行なっている。Bromley, D. B. 1977 *Personality description in ordinary language.* London : Wiley.

Allport and Odbert の論文の意義は，この論文発表の数年後にはもう Cattell がこれを使った研究を発表したことからわかるように，その実用的な側面では適切な評価を受けてきたし，その評価は今日でも変らない。その反面，その方法論的意義に言及されることは極めて少なかったように思われる。この点で Bromley の著作は興味深いものであるが，本稿脱稿後に入手したためにこれに言及できなかった。これは将来の課題としたい。

付表1. ＡＣＬ項目の出現率，評定尺度値，ＡＣＬ次元座標値。

項　　目	出現率 %	評定尺度値 〝好ましい〟	評定尺度値 〝外向的〟	ＡＣＬ次元値 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
1）明るい	45	1.42	1.43	1.19	0.33	−0.86	−0.64
2）意地っぱり	21	−0.75	−0.26	0.39	−1.31	1.68	0.49
3）陰　気	5	−1.12	−1.88	−2.46	−1.57	−0.19	−0.02
4）内　気	38	−0.46	−1.86	−1.68	0.09	−0.20	−0.48
5）おおらか	23	1.35	0.98	−1.07	0.58	−1.07	0.71
6）臆病な	14	−0.80	−1.70	−1.03	−1.72	−0.01	−1.19
7）怒りっぽい	13	−1.05	−0.18	0.20	−1.49	1.80	−1.45
8）落着きのある	16	1.16	0.16	−0.46	1.62	0.72	1.31
9）おとなしい	37	−0.10	−1.38	−1.22	0.92	−0.32	0.67
10）思いやりのある	35	1.42	0.33	0.37	0.64	0.17	−0.32
11）温　和	35	1.20	0.11	−0.08	0.77	−0.97	0.72
12）活　発	16	1.16	1.60	2.36	0.30	−0.41	−1.99
13）感情的	18	−0.41	0.56	0.22	−1.36	1.41	−1.22
14）頑張り屋	21	1.39	0.21	−0.03	1.57	2.15	0.08
15）気が長い	13	0.56	−0.55	−0.24	1.32	−0.50	3.39
16）キザな	1	−0.97	0.54	−0.56	−0.97	2.23	1.18
17）機敏な	9	1.21	1.02	1.13	0.96	1.58	−2.23
18）気分屋	23	−1.15	0.02	0.35	−1.78	0.04	0.36
19）協調的	28	1.04	0.87	0.76	0.49	−0.30	−0.09
20）口べた	44	−0.60	−1.80	−1.10	0.15	−0.49	−0.27
21）軽薄な	10	−1.27	−0.08	0.00	−2.06	−0.05	0.22
22）堅実な	13	1.22	0.00	−0.10	2.00	1.86	−0.08
23）強引な	5	−0.57	1.00	1.55	−1.43	2.65	2.38
24）行動的	13	1.18	1.60	2.27	0.04	0.14	−1.27
25）高　慢	1	−1.24	0.01	0.18	−2.38	2.21	1.98
26）こり性	19	0.32	−0.04	0.35	−0.11	1.66	1.59
27）根気強い	15	1.41	0.31	−0.01	2.14	2.35	0.81
28）自己中心的	12	−1.25	−0.24	0.05	−2.25	2.32	1.32
29）自尊心の強い	23	−0.52	0.43	0.36	−0.44	1.16	−0.07
30）自分勝手	7	−1.22	0.15	0.20	−3.63	2.52	2.50
31）重厚な	1	1.10	−0.33	0.23	1.97	−0.74	1.38
32）消極的	25	−0.90	−1.89	−2.21	−0.29	−0.81	−0.83
33）小心な	11	−0.73	−1.51	−1.33	−0.92	−0.33	−0.78
34）慎重な	27	1.00	−0.22	−0.80	1.15	0.85	−0.28
35）図々しい	6	−1.17	0.72	1.19	−1.84	−0.18	0.36

項　　目	出現率%	評定尺度値 〝好ましい〟	評定尺度値 〝外向的〟	ACL次元値 I	ACL次元値 II	ACL次元値 III	ACL次元値 IV
36）すなお	29	1.32	0.53	0.31	0.55	−0.68	−0.29
37）責任感が強い	33	1.27	0.45	0.22	0.63	0.49	−0.31
38）積極的	10	0.98	1.60	2.10	0.64	1.45	−1.11
39）そそっかしい	33	−0.61	0.60	0.61	−0.81	−0.77	−0.33
40）大胆な	3	0.03	1.25	2.24	0.52	0.70	0.28
41）短　気	16	−0.81	0.23	−0.15	−1.37	0.44	−1.39
42）知　的	6	1.31	−0.20	1.13	0.69	0.80	0.88
43）でしゃばり	3	−1.06	0.90	0.65	−2.57	0.96	−0.23
44）努力家	20	1.30	0.03	−0.08	1.62	1.95	−0.04
45）鈍重な	1	−0.76	−0.69	−1.42	−0.45	−1.33	1.55
46）内向的	30	−0.50	−2.08	−1.82	0.03	0.08	−0.46
47）のんき	29	−0.11	−0.42	0.19	−0.16	−1.59	2.35
48）恥ずかしがり	39	−0.25	−1.25	−0.74	−0.15	−0.62	−0.92
49）ひかえ目	18	0.41	−1.41	−0.95	0.86	−0.90	−0.31
50）ほがらか	20	1.23	1.03	1.11	0.49	−0.98	−0.04
51）見栄っぽり	13	−1.05	0.81	0.29	−1.26	0.24	0.11
52）無鉄砲な	4	−0.66	0.53	1.25	−1.43	0.37	0.61
53）明　朗	19	1.40	1.45	1.49	0.41	−1.22	−0.57
54）勇敢な	3	1.15	1.16	1.68	0.60	−0.05	−2.41
55）陽　気	27	1.34	1.62	1.30	0.09	−1.04	−0.66
56）弱　気	10	−0.79	−1.77	−2.14	−1.43	−0.88	−0.45
57）楽天的	32	0.85	1.43	1.04	−0.17	−1.23	1.37
58）利己的	8	−1.05	−0.13	−0.48	−3.07	2.98	1.92
59）冷　静	11	0.99	−0.08	−0.44	1.49	0.74	1.32
60）わがまま	13	−1.20	−0.02	0.46	−1.71	0.89	−0.13
61）あきっぽい	18	−1.09	0.06	−0.36	−1.69	−0.22	0.53
62）いじわる	1	−1.26	−0.55	−0.53	−2.38	2.55	3.79
63）うそつき	3	−1.24	−0.70	−0.45	−2.61	0.54	0.85
64）うるさい	3	−0.96	0.49	1.78	−1.91	−1.00	−2.18
65）おしゃべり	6	−0.65	0.94	1.36	−2.12	−1.10	−0.67
66）おっちょこちょい	29	−0.49	0.46	0.84	−0.80	−0.99	−0.45
67）お人よし	28	0.25	−0.38	0.31	0.32	−0.83	0.30
68）おもしろい	20	0.76	1.55	1.09	−0.20	−0.91	−0.46
69）活動的	10	1.29	1.53	2.14	0.43	0.08	−2.35
70）頑　固	8	−0.59	−0.27	0.69	−0.16	1.76	0.43

項 目	出現率%	評定尺度値 〝好ましい〟	評定尺度値 〝外向的〟	ACL次元値 I	ACL次元値 II	ACL次元値 III	ACL次元値 IV
71) 寛 大	14	1.32	1.03	0.60	0.84	−0.75	1.63
72) 気が小さい	24	−0.81	−1.93	−1.85	−0.51	−0.73	−1.79
73) きちょうめん	24	1.15	−0.31	−0.38	1.19	2.02	0.04
74) きどる	7	−1.02	0.60	0.17	−1.58	0.96	0.51
75) 暗 い	3	−1.01	−1.89	−2.02	−1.99	−0.64	0.11
76) 計画的	19	1.20	0.37	0.16	1.25	1.17	−0.78
77) 軽 率	11	−1.16	0.13	0.29	−1.98	0.05	0.13
78) ごうまん	1	−1.19	0.50	−1.01	−3.48	1.62	3.94
79) 自主的	14	1.16	1.43	1.47	0.40	1.33	−0.87
80) 静かな	14	0.17	−1.33	−1.41	0.99	0.12	1.76
81) しつこい	7	−1.10	−0.63	0.35	−1.72	1.30	0.99
82) 社交的	9	0.64	1.54	2.25	0.16	−0.46	−0.50
83) 正 値	30	1.28	0.45	−0.05	0.73	−0.01	0.15
84) 神経質	32	−0.85	−0.96	−0.52	−0.25	0.69	−0.29
85) 親 切	26	1.37	0.47	0.38	0.64	0.15	0.01
86) 心配性	30	−0.37	−1.07	−0.66	−0.12	−0.12	−1.23
87) ずるい	5	−1.25	0.01	0.26	−1.31	2.84	0.48
88) 誠 実	15	1.29	0.44	0.00	1.57	0.86	−0.62
89) せっかち	6	−0.70	0.53	0.62	−0.76	0.30	−1.22
90) だらしない)	12	−1.22	−0.43	0.49	−1.41	−1.30	1.36
91) 単 純	16	−0.24	0.29	0.10	−1.20	−0.74	−0.54
92) 冷たい	2	−1.16	−0.65	−1.08	−1.91	2.54	3.18
93) てれや	44	0.08	−0.35	−0.47	0.18	−0.30	−0.56
94) なまいき	3	−1.16	0.28	1.22	−2.99	2.07	−0.29
95) 熱中する	26	0.70	0.32	0.37	0.49	0.55	0.68
96) のんびり	21	0.06	−0.33	−0.35	0.34	−1.37	2.95
97) はにかみ	14	−0.44	−1.73	−1.51	−0.05	−0.97	−0.71
98) 悲観的	6	−0.96	−1.56	−0.99	−1.60	0.42	−0.31
99) ひっこみ思案	21	−1.02	−1.93	−2.04	−0.41	−0.67	−0.55
100) まじめ	32	1.20	−0.57	−0.44	0.94	0.38	−0.37
101) 無 口	16	−0.66	−1.80	−2.29	0.51	−0.20	0.11
102) 面倒くさがり	32	−1.06	−0.37	−0.24	−0.91	−0.69	0.57
103) やさしい	26	1.33	0.05	0.37	0.70	−0.04	−0.29
104) ユーモアのある	30	1.12	1.40	1.00	0.12	−0.66	−0.22
105) 楽観的	28	0.70	1.23	0.74	−0.01	−0.90	1.74

付表2． 自己記述から収集された特性語とその使用頻度（頻度無記入の語はすべて頻度1）

愛情		内気	41	外向的	2	気が短い	2
あいまい		うちこまない		開放的	3	気が弱い	19
明るい	83	うちとけやすい		かげがある		聞き上手	
あきっぽい	19	移り気	3	賢い		ぎこちない	
あきやすい	2	うるさい	2	かたい		キザ	
あきらめが早い		運動好き	2	勝気	4	きさく	2
あきらめやすい		おおざっぱ		かっこわるい		きちょうめん	14
あきらめない		おおまか		勝手な	2	きどる	
あっさりした		おおらか	7	活動的	20	機敏	2
あほう		臆病	5	活発な	95	気分屋	14
甘い		怒らない		活発でない		気前がいい	
甘えや		怒りっぽい	7	我慢強い		きまぐれ	5
甘えん坊		怒りやすい		我慢しすぎ		きまじめ	3
ありきたりな		おごる		寡黙な		きまま	4
あわてもの		おしゃべり	2	考えがち		気むずかしい	3
あわてんぼ		おせっかい	2	考えこみやすい		客観的	
安易		オセンチ		考えすぎ	2	器用	3
いいかげん		おだやかな	4	考え深い		強固	
意志が弱い	3	落着きのある	11	考えっぽい		協調的	9
意志薄弱		落着きのない	9	簡潔な		協力的	2
意識しすぎ		おっちょこちょい	12	頑固な	14	きれいずき	4
一心不乱		お天気屋	2	感じやすい		気を使う	2
意地がない	2	おっとり		感受性大		気をまわす	
意地っぱり	6	男らしい	2	感情的	5	勤勉	4
意地悪		男らしくない		寛大な	3	空想的	2
一本気	2	おとなしい	180	がんばりや	3	ぐずぐず	
いやみ		おとなしすぎる		完ぺき主義		くそまじめ	
意欲的		大人に好かれる		寛容な		口うるさい	
依頼心が強い	2	お人よし	13	気がいい		口が悪い	
いらいらする		思いやりのある	6	気が多い		口数が少い	2
陰うつな		思いやりのない		気がきかない		口べた	7
陰気	7	おもしろい	5	気が小さい	20	くどい	
陰険		温厚	5	気が強い	2	くよくよしない	2
うそがきらい		温和	14	気が長い	9	くよくよする	2
うそつき		快活	4	気がはやい		暗い	2

クール		根気がない	5	正直な	21	世話やき	2
苦労性	3	根性がある	2	常識的		繊細な	2
計画的	8	細心な		小心な	15	洗たく好き	
軽率	7	さえない		情緒不安定		躁うつ的	2
軽薄	2	さっぱりした	3	情緒のない		騒騒しい	
決断力がある		寂しがり	4	情にもろい		想像性豊か	
決断力不足	4	自意識過剰		情熱的	2	そこつな	
潔白		自意識が強い		思慮深い	3	そそっかしい	
謙虚		自虐的		神経過敏		率直な	4
堅実	2	自己中心的		神経質	39	素ぼくな	2
現実的	2	思索的		信じやすい		怠惰な	
献身的	2	自主的	7	親切な	35	大胆な	2
建設的		自信過剰		慎重な	20	怠慢な	3
健全な		自信がない	2	心配性	5	妥協的	2
謙そん		静かな	13	辛抱強さ	2	打算的	2
倹約		自制心がある	3	スケベ		多弁な	
好奇心	3	自尊心が強い	13	すなお	32	ためらいがち	3
公共心		親しみやすい		図太い		頼りがいのある	
強情な	10	しっかりした		スポーツ好き	2	頼りない	
向上心		しつこい	2	ずぼらな	2	だらしない	10
行動的	8	実行力がある		ずるい	3	短気な	57
公正な	3	実行力がない		鋭い		単純な	6
合理的	2	実直な		スロー		淡白な	
こうるさい		指導性がない		誠意がある	2	力強い	
高慢		自分に厳しい		正義感	2	着実な	2
ごうまん		自分本位		清潔な	3	注意散漫	2
心の広い		地味な	2	精力的	3	調子に乗る	3
個性的	3	社交的	4	誠実な	10	調子に波がある	
こだわらない		自由な	2	精神分裂	2	直観的	
孤独な	2	従順な	3	責任感が強い	14	沈着な	
子供っぽい	2	集中できない		赤面症		付合いがいい	2
こり性	10	主体性がない		せっかちな	5	冷たい	
こわがり		受動的		積極的	15	強気な	3
細やかな		純情な		せわしい		ていねいな	
根気強い	23	消極的	47	世話好き	3	適応力がない	

適当な	3
でしゃばり	
てれや	9
天気屋	
同情的	3
動物好き	
独占欲が強い	2
独走気味	
独創的	
独断的	
どじな	2
どなる	
捕え所のない	
努力家	10
鈍感な	2
鈍くさい	
内向的	14
なげやりな	
情深い	
なまいきな	
なまけ者	2
波がある	2
涙もろい	2
成行まかせ	
にぶい	
二面的	
人間的	
人情がある	3
忍耐強い	4
ぬけめのない	
熱情的	
熱心な	
熱中する	5
粘り強い	
粘る	
乗りやすい	3
のろい	
のろま	2
のんきな	32
のんびり	15
排他的	
バカ	4
薄情な	
激しい	
恥ずかしがり	12
はっきりいう	
はつきりしない	3
話好き	4
話下手	3
はにかみや	5
早とちり	3
早のみこみ	
非外向的	
ひかえめな	6
非活動的	2
悲観的	11
非協調的	3
非社交的	6
非常識な	
非積極的	2
引込思案	8
人がいい	
人付合いがいい	
人に頼る	
人になれない	
人にやさしい	
人みしりする	4
人目を気にする	2
ひよわな	
敏感な	
無愛想な	
不安定な	5
不活発な	7
複雑な	
ふざけた	
無精な	2
不遜な	
ふてくされる	
ふぬけ	
不まじめ	
フエミニスト	
不用心	
プライドが高い	
分析的	
分別のある	
平和な	
へそまがり	
放漫な	
抱擁力	
ほがらかな	5
保守的	
ぼっさり	
凡才	
負けずぎらい	5
負けん気が強い	2
まじめな	75
まめな	
迷う	
みえっぱり	
無関心な	3
無気力な	3
無口な	23
無邪気な	2
無神経な	
無責任な	3
むだがない	
無知な	
無頓着な	
無欲な	
明朗な	37
めだたない	
めだちたい	
面くい	
面倒くさがり	6
綿密な	
ものぐさな	
物事にこだわる	
もの静かな	2
ものずきな	
躍動的	
やさしい	62
ゆううつな	
勇敢な	
勇気のある	
友好的	5
優柔不断	3
融通のきかない	
愉快な	3
夜明のガス燈	
陽気な	25
用心深い	
幼稚な	2
要領のいい	
よく笑う	
よくしゃべる	
余裕のある	
弱気な	4
弱々しい	
楽観的	29
楽天的	18

理屈っぽい	3
理屈屋	
りこうな	
利己的	12
理想主義	3
利他的	
律義な	2
良心的	
ルーズ	
礼儀知らず	
冷静な	14
冷淡な	
劣等意識	
ロマンチスト	
ロマンチック	
わがままな	12
忘れっぽい	2
笑い好き	
わりきる	

『息子と恋人』について

―キリスト教的世界からの解放―

豊　国　　孝

On *Sons and Lovers*

―The Release from the Christian World―

Takashi Toyokuni

Abstract

Studies and criticisms on D. H. Lawrence's autobiographical novel, *Sons and Lovers,* contain a wide variety of criticisms from Freudian criticisms on the Oedipus-complex theme of this novel to anti-Freudian criticisms, i. e. the vitalist-ethical approaches, and innovative studies of images and symbols such as Mark Spilka's studies concerned with recurrent images of flowers and Evelyn J. Hinz's article on Lawrence's clothes metaphor. There are, however, few studies concerned with the religious allusions and images in this novel as Charles Rossman says in his study, "The Gospel According to D. H. Lawrence : Religion in *Sons and Lovers.*"

This paper is, therefore, an attempt to analyze *Sons and Lovers* from the viewpoint of religious imagery and symbolism, concluding that Lawrence describes the hero's release from the Christian, sacred world which the "Word" or the Spirit dominates, ironically using religious images and symbols.

D．H．ロレンスの自伝的小説『息子と恋人』については今迄に多くの研究や批評がなされており，それはエディプス＝コンプレックスを中心テーマとするフロイド的批評から，"vitalist"，即ち活力論者的，倫理的アプローチを試みようとする反フロイド的批評，また Mark Spilka や Evelyn J. Hinz のように花や衣服のイメージについての詳細な研究[1]といったように多種多様である。この小論では Charles Rossman にならい[2]，この小説に用いられてい

る宗教的イメージをとりあげ検討し,『息子と恋人』は宗教的イメージを使いながら，キリスト教的世界からのポールの解放を描いていることを結論づけたいと考える。

1.

まず，ある意味でこの小説の中心人物であるといっても過言ではないガートルード・モレル (Gertrude Morel) の世界を分析してみることにする。この小説の冒頭は‘ “The Bottoms” succeeded to “Hell Row.” ’(3)というベストウッド（Bestwood）の描写で始まる。ベストウッドはノッティンガム (Nottingham）ちかくの炭坑の町であるが, “Hell Row” という名前からしてピューリタン的名前と考えられる。この「地獄長屋」そして「谷底長屋」は美しい自然の風物，さらには，その長屋に住む坑夫たちの人間性そのものが機械文明によって毒されてきていることの象徴でもある。また，これはウォルター（Walter）とガートルード・モレルというまったく異質な夫婦の絶望的男女関係のシンボルともいえる。この二人の出会はあるクリスマスパーティにおいてである。

ここで注意しなければならないのは『息子と恋人』のストリーを支配する時間はクロノロジカルな俗的時間よりは「聖なる時間」つまり“Christian Calendar”(4)であるということである。この小説では重要な事柄はみなクリスマスに起こる。ウォルターとガートルードが初めて出会うのはクリスマスであり，次のクリスマスに二人が結婚し，三度目のクリスマスには彼女は長男ウィリアム (William) をみごもっている。後にウィリアムが凱旋将軍のようにお土産を持ってロンドンから帰郷するのもクリスマスイヴであり，若い恋人を伴ってやってくるのもクリスマスである。クリスマスに肺炎にかかったポールが快復し，ラストシーンでモレル夫人が亡くなるのもクリスマスちかくである。したがって,『息子と恋人』ではクリスマスは物語の展開上重要な時間ということになる。もちろん，クリスマスは主キリストの誕生の時期であるが，同時に十字架にかけられるキリストのイメージも連想される，つま

り，生と死との二重のイメージをもっている時間であり，Mircea Eliade のいうように「聖なる時間」でもある。

> One essential difference between these two qualities of time strikes us immediately : *by its very nature sacred time is reversible* in the sense that, properly speaking, it is *a primordial mythical time made present.* Every religious festival, any liturgical time, represents the reactualization of a sacred event that took place in a mythical past, "in the beginning." Religious participation in a festival implies emerging from ordinary temporal duration and reintegration of the mythical time reactualized by the festival itself. Hence sacred time is indefinitely recoverable, indefinitely repeatable.(5)

「俗なる時間」に対してクリスマスは繰返し可能な「聖なる時間」，永遠で円環的時間といえる。つまり，生と死というダブルイメージをもつキリスト教的「聖なる時間」がこの小説の主要な登場人物 — ポール，モレル夫婦，ウィリアム — を支配しているともいえよう。

ロレンスは二度目の "Foreward" の中で次のように述べている。

> And the Word is not spoken by the Father, who is Flesh, forever unquestioned and unanswerable, but by the Son. Adam was the first Christ : not the Word made Flesh, but the Flesh made Word. Out of the Flesh cometh the Word, and the Word is finite, as a piece of carpentry, and hath an end. But the Flesh is infinite and has no end. Out of the Flesh cometh the Word, which blossoms for a moment and is no more. Out of the Flesh hath come every Word, and in the Flesh lies every Word that will be uttered. The Father is the Flesh, the eternal and unquestionable, the law-giver but not the law ; whereas the Son is the mouth. And each law is a fabric that must crumble away, and the Word is a graven image that is worn down, and forsaken, like the Sphinx in the desert.(6)

ロレンスはキリスト教の「言葉」，つまり精神の一方的な強調は「肉」，すなわち肉体の冒瀆であると主張する。彼は「初めに言葉ありき」ではなく「肉」が先に存在したと，「肉」の優位を主張する。したがって，モレル夫妻やポールが生きている社会は，そうした「肉」を否定するゆがめられたキリスト教的社会であり，それを支配するのがキリスト教的「聖なる時間」，クリスマス

なのである。

クリスマスパーティでガートルード・コパード (Coppard) はウォルター・モレルに会う。彼女が彼にひかれるのはモレルが真っすぐで均整のとれた見事な体をし，黒いひげをはやし，血色がよく，活気に満ちて，ソフトで暖かな感じがするからである（p．8）。これに対しガートルードは小柄で繊細，青い目と美しい手をしている。彼女は知識を愛し，宗教，哲学，政治についての議論が大好きな知的タイプの女性であり，正直で純粋で宗教心が強い。厳格な組合教会信者の中流家庭に育ったガートルードはピューリタン的宗教心を受けついでいる。モレルが官能的で無知であるが，素朴なバイタリティに満ちた「肉」の世界に属する一種の原始人であるのに対し，ガートルードは知性豊かで，意志強く，宗教心の深い「言葉」の世界，つまり，キリスト教的世界の住人である。とくに，彼女について強調されるのは，その宗教心の強いピューリタン的性格であり，彼女が禁酒，禁煙論者であるのもそういった性格に基づいているからである。モレル夫妻のこうした差異は次第に彼等の男と女の関係をゆがめていき，絶望したガートルードは彼女の愛を息子たちに向けることになる。一方ウォルターは酒に浸り粗野になり，バイタリティや生命力を次第に失ってゆくことになる。このモレル夫妻の男と女の関係における葛藤は『息子と恋人』の物語が展開する上で重要な契機であり，またエディプス＝コンプレックス的母と息子の関係をひき起こす要因となるのである。

坑夫であるモレルが一日の大半をすごす世界は暗黒の坑内であり，この坑内は "a symbol of rhythmic descent and ascent, like a sexual rhythm, or like the rhythm of sleep and awaking or of death and life"(7)である。モレルをとりかこむイメジヤリイは "fleshy, red, moist, warm, nocturnal"(8) と考えられる。彼はアンダーグランドの住人でありプルートといえよう。一方花を愛するガートルードの住む世界は子供たちのいる家庭であり，地上の光あふれる世界である。それは精神的で宗教的世界である。彼女は一面においてロレンスの非難する「言葉」に重点を置くキリスト教の知的世界を好んでいるが，

子供たちには惜しみない愛と豊かな生命力を与えてくれるのである。66頁では「彼女（ガートルード）は勇敢で生命にあふれているようにみえる」と書かれている。ポールが母親に花をもってくる場面では "The vitality, the animation, the healthy glow of the life-flame, is typical of Mrs. Morel."(9)と Mark Spilka が述べている。モレル夫人が病気になって息子ポールのそばでアイロンをかけているシーンでは，"warm" という形容詞がしばしば用いられ，彼女のバイタリティを暗示する。ガートルードにはそういった病気を治してくれる力，つまり，生命力があるのである。

> Paul loved to sleep with his mother. Sleep is still most perfect, in spite of hygienists, when it is shared with a beloved. The warmth, the security and peace of soul, the utter comfort from the touch of the other, knits the sleep, so that it takes the body and soul completely in its healing. Paul lay against her and slept, and got better : whilst she, always a bad sleeper, fell later on into a profound sleep that seemed to give her faith. (p. 67)

これは上気嫌のモレルが子供たちを前にして，物を作ったり仕事をしたりするとき，彼から発散する暖かな生命力と共通であると思われる。したがって，Dorothy Van Ghent のように母の世界を父の "life principle" に対比された "death principle" の世界と単純に図式化してしまうことには賛成できかねる。

> The symbolism of the pits is identical with that of Morel, the father, the irrational life principle that is unequally embattled against the death principle in the mother, the rational and idealizing principle working rhythmlessly, greedily, presumptuously, and possessively.(10)

それは父と母の世界がはっきりとした相違を示しながらも，微妙に重なりあうところがあるのを見落してしまうことになりかねない。ポールと恋人ミリアム・リーヴァズ（Miriam Leivers）がクレアラ（Clara）と彼女の夫バクスター・ドーズ（Baxter Dawes）との結婚生活を論じる場面で，ポールは自分の父と母は初めはお互に情熱をもって愛しあっていたと次のように話す。

"It was something like your mother and father," said Miriam.

"Yes ; but my mother, I believe, got real joy and satisfaction out of my father at first. I believe she had a passion for him ; that's why she stayed with him. After all, they were bound to each other."

"Yes," said Miriam.

"That's what one *must have,* I think," he continued—"the real, real flame of feeling through another person—once, only once, if it only lasts three months. See, my mother looks as if she'd had everything that was necessary for her living and developing. There's not a tiny bit of feeling of sterility about her."

"No," said Miriam.

"And with my father, at first, I'm sure she had the real thing. She knows ; she has been there. You can feel it about her, and about him, and about hundreds of people you meet every day ; and, once it has happened to you, you can go on with anything and ripen." (p. 317)

ポールによれば，一見似ているドーズ夫妻とモレル夫妻の違いは，後者は結婚生活の数個月間はお互いに「肉」を通して "real flame of feeling" つまり，男と女の関係におけるリアリティを感じることができたということであろう。

しかし，ピューリタン的宗教心の強いガートルードにとっては完全な夫を望んでいるのであり，酒に浸り暴力を振うモレルを決して許すことができない。彼女にとって家庭はまさに神聖で侵すべからざる場所である。モレル夫人は Eliade のいう「宗教的人間」であり，これが夫との本質的相違点である。

Religious man thirsts for being. His terror of the chaos that surrounds his inhabited world corresponds to his terror of nothingness. The unknown space that extends beyond his world—an uncosmicized because unconsecrated space, a mere amorphous extent into which no orientation has yet been projected, and hence in which no structure has yet arisen—for religious man, this profane space represents absolute nonbeing. If, by some evil chance, he strays into it, he feels emptied of his ontic substance, as if he were dissolving in Chaos, and he finally dies.(11)

Religious man's profound nostalgia is to inhabit a "divine world," is his desire that his house shall be like the house of the gods, as it was later represented in temples

and sanctuaries. In short, this religious nostalgia expresses *the desire to live in a pure and holy cosmos, as it was in the beginning, when it came fresh from the Creator's hands.*[12]

ガールードにとって家庭は神の創造された宇宙，コスモスの写しであり，夫の暴力や誤魔化しは聖なる世界を根底からくつがえすことになる。だからこそ，妻は死にものぐるいで夫と戦い，ついには子供たちまで仲間にひき入れて，モレルの存在を無意味なものにしてしまうのである。

ガートルードについての宗教的なイメージはよく引用される有名な"Moon scene"につかわれる。

She became aware of something about her. With an effort she roused herself to see what it was that penetrated her consciousness. The tall white lilies were reeling in the moonlight, and the air was charged with their perfume, as with a presence. Mrs. Morel gasped slightly in fear. She touched the big, pallid flowers on their petals, then shivered. They seemed to be stretching in the moonlight. She put her hand into one white bin : the gold scarcely showed on her fingers by moonlight. She bent down to look at the binful of yellow pollen ; but it only appeared dusky. Then she drank a deep draught of the scent. It almost made her dizzy. (p. 24)

ウォルターから口論の末外に締め出されたガートルードは月光をあびた白いゆりの花が咲く中で一種の失心状態になる。ゆりの花は聖書にも出てくるように「聖なる花」であり，キリスト教と深い関係をもっている。これはキリスト教では鳩とともに受胎告知の象徴であり，"purity" "chastity" "heavenly bliss"[13]をあらわしている。しかし，ゆりは同時にセクシアルなものにも関係があり，欲望や性行為，さらには"phallus"や"fertility"[14]も意味していると考えられる。したがって，ゆりの花はガートルードの性格の高潔さや，正直，宗教心の強さと同時に彼女の性的欲望を象徴しているのである。

さらに，この場面に神秘感を与える「月」はEliadeのいうように死と復活を象徴するもので，宗教的イメージである。

In general most of the ideas of cycle, dualism, polarity, opposition, conflict, but also

of reconciliation of contraries, of *coincidentia oppositorum,* were either discovered or clarified by virtue of lunar symbolism. We may even speak of a metaphysics of the moon, in the sense of a consistent system of "truths" relating to the mode of being peculiar to living creatures, to everything in the cosmos that shares in life, that is, in becoming, growth and waning, death and resurrection. For we must not forget that what the moon reveals to religious man is not only that death is indissolubly linked with life but also, and above all, *that death is not final, that it is always followed by a new birth.*(15)

とくに,「宗教的人間」であるガートルードにとって月は死と同時に生を与える存在である。この場面で彼女のモレルにたいする愛が死にたえるのであるが，皮肉にもガートルードは夫との愛のあかしであるポールを身ごもっているということになる。

第2部でポールが母に大聖堂（Lincoln Cathedral）を見せにつれてゆく場面があるが，リンカン大聖堂は宗教的イメージそのものである。

"Ah !" she exclaimed. "So she is !"

He looked at his mother. Her blue eyes were watching the cathedral quietly. She seemed again to be beyond him. Something in the eternal repose of the uplifted cathedral, blue and noble against the sky, was reflected in her, something of the fatality. What was, *was*. With all his young will he could not alter it. He saw her face, the skin still fresh and pink and downy, but crow's-feet near her eyes, her eyelids steady, sinking a little, her mouth always closed with disillusion ; and there was on her the same etenal look, as if she knew fate at last. He beat against it with all the strength of his soul. (p. 240)

このシーンではポールにとって母は永遠に立っている大聖堂の写しであるかのように思える。モレル夫人は「聖なる空間」である大聖堂そのものによってシンボライズされているのである。Eliade によれば，大聖堂は世界の模型であり，天上の原型の写しである。

The Christian basilica and, later, the cathedral take over and continue all these symbolisms. On the one hand, the church is conceived as imitating the Heavenly Jerusalem, even from patristic times ; on the other, it also reproduces Paradise or the

celestial world. But the cosmological structure of the sacred edifice still persists in the thought of Christendom ; for example, it is obvious in the Byzantine church.[16]

このようにモレル夫人の世界はキリスト教的イメージやシンボルにより，その宗教性が強調されている。もちろん，息子とのエディプス＝コンプレックス的関係や女性の所有欲，母親の支配欲がウィリアムの死やポールの男性としての成長を妨げる要因となるのだが，その根本には「肉」を否定し「言葉」を尊重するキリスト教的考えが存在しているのである。作家ロレンスは母親を共感をもって描写しているのであるが，彼女の「言葉」第一主義，キリスト教的考え方を容赦なく告発しているのである。

第 14 章「解放」において癌にかかっているモレル夫人は死ぬ運命にあるのだが，生を完全に生きえなかった彼女はなかなか死ぬことができない。彼女の苦しみを見かねたポールは多量のモルヒネを入れたミルクを彼女に飲ませて殺す。この有名な母の「安楽死」の場面はいろいろ問題のあるところである。

> That evening he got all the morphia pills there were, and took them downstairs. Carefully he crushed them to powder.
>
> "What are you doing?" said Annie.
>
> "I s'll put'em in her night milk."
>
> Then they both laughed together like two conspiring children. On top of all their horror flicked this little sanity.
>
> Nurse did not come that night to settle Mrs. Morel down. Paul went up with the hot milk in a feeding-cup. It was nine o'clock. (p. 394)

これは愛する母の苦悩を見かねた孝行息子の行為であると同時に愛する父のために母を殺すオレステスの行為でもある。[17] ポールはその前にも母を窒息死させたいと思ったり，母があまり長く生きないようミルクを水で薄めたりしている。しかも，母を殺すために用いられるミルクは本来は栄養を与えるものであり，"fertility" とか "regeneration" の象徴であるのに，この場面では死をもたらす毒という皮肉なイメージをもっている。

> Then sometimes he hated her, and pulled at her bondage. His life wanted to free itself of her. It was like a circle where life turned back on itself, and got no farther. She bore him, loved him, kept him, and his love turned back into her, so that he could not be free to go forward with his own life, really love another woman. At this period, unknowingly, he resisted his mother's influence. He did not tell her things ; there was a distance between them. (p. 345)

上記の引用からも明らかなようにポールは無意識的に母からの拘束からのがれたいと考えているのである。「安楽死」はポールの自己解放の決定的行為である。

> But, on a deeper level, the killing and the desire to smother his mother have a significance which he is not aware of consciously. I think we must concur with Anthony West and Graham Hough that Paul's killing of his mother represents, symbolically, both a repudiation of what she stands for[1] and a decisive act of self-liberation[2], as does his turning towards the city at the end of the book . . .[(18)]

この "mercy killing" の問題はポールのエディプス＝コンプレックスからの解放であるとともに，ガートルードのあらわすもの，つまり，キリスト教的「言葉」の世界からの解放を意味していると思われる。しかも，この解放がキリスト教ではタブーである母親殺害によって成しとげられるところに作者ロレンスの皮肉な意図が潜んでいるのではなかろうか。

2.

第2部ではポールを中心にミリアムやクレアラとの恋，それに母親モレル夫人がからむ複雑な関係が描かれ，結末は母の死そしてポールの解放となるわけである。ここではミリアムの世界を中心にして考えてみることにしよう。

ポールの名前はガートルードの父ジョージ・コパード (George Coppard) が共感をもっている聖パウロ (Apostle Paul) からつけられている。モレル夫人は赤ん坊を抱いて夕日を見ている場面で赤ん坊にポールという名前をつけることにする (p. 37)。それはある意味でコパード家にながれている宗教心

をわが子に伝えようとする母親の無意識的行為とも考えられる。したがって，ポールは母の精神的，キリスト教的な面と父の官能的，異教的なバイタリティ，つまり，生命力の二面をもち，自己の中の葛藤に苦しむことになる。父と母との関係における葛藤がそのまま息子ポールの内面を二分し，彼を苦悩させることになる。成長したポールは繊細で神経質で感受性にとみ，一方素朴で官能的で「生命の炎」をもっている。彼は父親と同じ坑夫たちのもつバイタリティや生命力にどこかで共感しているのであるが，彼等の態度や言葉づかいに反発を感じている。そういった面でポールは彼の父母よりより複雑な現代人であるといえよう。

ポールの恋人となるミリアムはウィリイ農場（Willey Farm）の娘である。彼女はロマンティックで，スコットの小説のヒロインのような女性である（p．142）。ミリアムという名前は聖母マリア（Mary）のバリエイションであり[19]，彼女の寝室には聖カタリナの肖像画がかかっている（p．170）。彼女は宗教心のあつい母親リーヴァズ夫人に似て，宗教的熱情をもった女性で“nun”とポールに呼ばれる。

> And then the celandines ever after drew her with a little spell. Anthropomorphic as she was, she stimulated him into appreciating things thus, and then they lived for her. She seemed to need things kindling in her imagination or in her soul before she felt she had them. And she was cut off from ordinary life by her religious intensity which made the world for her either a nunnery garden or a paradise, where sin and knowledge were not, or else an ugly, cruel thing. (p. 148)

ミリアムは自分の心の中に作りあげた空想の世界に住んでおり，俗的世界を拒否しているといえる。それはある意味でキリスト教的「聖なる世界」とも考えられよう。彼女は精神的で「宗教的人間」である点でも，ポールの母モレル夫人に似ている。モレル夫人は宗教，哲学に興味をもち，ミリアムは文学好きで二人とも知的な女性である。だから，ポールはミリアムの中に母親の面影をみているのである。一方モレル夫人にとってミリアムは息子の魂まで抜きとってしまう危険な女性でライバル的存在であり，ポールの恋人とし

て認めたくないのである。モレル夫人にとってミリアムは "one of those who will want to suck a man's soul out till he has none of his own left" (p. 160) である。ポールに愛を抱いていることを意識したミリアムは次のように神に祈る。

> "But, Lord, if it is Thy will that I should love him, make me love him—as Christ would, who died for the souls of men. Make me love him splendidly, because he is Thy son."
>
> She remained kneeling for some time, quite still, and deeply moved, her black hair against the red squares and the lavender-sprigged squares of the patchwork quilt. Prayer was almost essential to her. Then she fell into that rapture of self-sacrifice, identifying herself with a God who was sacrificed, which gives to so many human souls their deepest bliss. (pp. 171—172)

ミリアムにとって祈りは不可欠な行為である。ポールへの愛は一種の自己犠牲であり，彼女は犠牲となられた神に自分をなぞらえて恍惚とする。彼女も「肉」を認めず「言葉」のみに重きをおくロレンスの非難するタイプの女性である。

第7章「少年と少女の恋」でポールとミリアムが散歩をする場面があるが，そこで彼女が見つけた白ばらの茂みが描写される。ばらはミリアムの処女性，精神性，そして抽象的思想といったもののシンボルであり，それを形容する "white" とか "holy" という語は彼女の不毛性や宗教的熱情を象徴している。花はミリアムの本性を暴露するのに効果的に用いられており，彼女が水仙の花を見つけそれを愛撫する場面ではポールは次のように彼女を批判する。

> "You're always begging things to love you," he said, "as if you were a beggar for love. Even the flowers, you have to fawn on them—"
>
> Rhythmically, Miriam was swaying and stroking the flower with her mouth, inhaling the scent which ever after made her shudder as it came to her nostrils. (p. 218)

彼女は愛を求める乞食であり，偽りの敬謙さをもって花に接するのである。

ミリアムの花にたいする態度は，同じく花を愛しているポールやモレル夫人に比べると，まったく自己流の愛し方にすぎず，花という「他者の存在」(other being) を認めることを拒否する行為といえよう。これが彼女とポールとの男と女の関係をシンボライズすることになる。

Mark Spilka はポール，ミリアムそして後で述べるクレアラの花にたいする態度が彼等の本質をはっきりと暴露していると次のように指摘している。

> And there is the crux of the matter : the flowers hold life as Paul himself holds life : his contact with the "God-stuff" is spontaneous and direct—he is alive and organic, and the flowers are his to take. But negative, spiritual, sacrificial Miriam "wheedle〔s〕 the soul out of things" ; she kills life and has no right to it. What is wrong for her is actually right for him, since life kindles life and death kills it—which is the essence of Laurentian communion.(20)

> And the key to all this revelation is how to pick flowers : Miriam, with false reverence : Paul with love, like a lover : and Clara not at all—but at least she respects the life in them, and later, when she is fully "awakened" by Paul, she will pick them, and the flowers, in their turn, will "defend" her.(21)

すべてのものにたいし自己犠牲をもって愛を押売りしようとするミリアムと花，つまり，自然との関係はそのままポールとの "man-woman relationship" にも投影されるのである。これこそロレンスが "love-will" として否定するものである。

> We think that love and benevolence will cure anything. Whereas love and benevolence are our poison, poison to the giver, and still more poison to the receiver. Poison only because there is practically no spontaneous love left in the world. It is all *will*, the fatal love-will and insatiable morbid curiosity. The pure sympathetic mode of love long ago broke down. There is now only deadly, exaggerated volition.(22)

ミリアムの愛は"love-will"「愛の意志」であり，偽りの自己犠牲がちらつくエゴイスティックな愛である。これに対してモレル夫人にはもっと素朴で素直な自然との交感があるという点で，まだ救われているという感がある。

ミリアムにとってすべてのものに神が存在するのである。

> But Miriam knew that one should be religious in everything, have God, whatever God might be, present in everything.
>
> "I don't believe God knows such a lot about Himself," he cried. "God doesn't know things, He *is* things. And I'm sure He's not soulful." (p. 251)

あまりにも精神的,宗教的なミリアムをポールは "holy nun" "mystic nun" と呼ぶ(p. 251)。彼女は歌をうたっている時も,まるで天に顔を向けてうたっている尼僧のようである(P. 279)。第11章でポールとミリアムは肉体的に関係を結ぶのであるが,それはミリアムの自己犠牲の上になりたっているにすぎない(p. 289)。彼女にはポールとの愛の行為も一種の宗教的犠牲なのである。これを契機としてポールとミリアムはお互いに別れることになる。

ミリアムのキリスト教的世界から逃がれることを欲するポールは彼女とは対象的な女性クレアラにひかれる。彼女は夫のバクスターと別居している。クレアラは解放的,積極的,行動的な女性で婦人参政権論者であり,肉感的な現代女性である。彼女は男性を軽蔑しているが,同時になにか満たされないものを感じている。

> Mrs. Dawes indifferently, as she shook hands with him. She had scornful grey eyes, a skin like white honey, and a full mouth, with a slightly lifted upper lip that did not know whether it was raised in scorn of all men or out of eagerness to be kissed, but which believed the former. She carried her head back, as if she had drawn away in contempt, perhaps from men also. She wore a large, dowdy hat of black beaver, and a sort of slightly affected simple dress that made her look rather sacklike. She was evidently poor, and had not much taste. Miriam usually looked nice. (pp. 184-185)

彼女は美しい腕とゆたかな胸をしており,それにポールはひきつけられる。クレアラはガートルードやミリアムと違う世界に住む女性であり,前二者が故郷のベストウッドに属すのにたいし,彼女は都会,ノッティンガムに属す女性である。

> He saw none of the anomaly of his position. Miriam was his old friend, lover, and she belonged to Bestwood and home and his youth. Clara was a newer friend, and she belonged to Nottingham, to life, to the world. It seemed to him quite plain. (p. 276)

ミリアムやガートルードは故郷そして家庭に属する過去の女性といえるのであるが，クレアラは都会，つまり，新しい未知の世界に住む現代女性である。ポールが彼女にひかれるのは精神的愛ではなく肉体的愛を求めているからであるが，キリスト教的「言葉」が拘束する世界からの解放を望んでいるからでもある。彼は彼女との「肉」による交感を通して，初めて“man-woman relationship”における実在，「情熱の炎」を知ることができる。それは，また，こうした関係を通してコスモスの神秘やリズムを感じることでもある。

> All the while the peewits were screaming in the field. When he came to, he wondered what was near his eyes, curving and strong with life in the dark, and what voice it was speaking. Then he realised it was the grass, and the peewit was calling. The warmth was Clara's breathing heaving. He lifted his head, and looked into her eyes. They were dark and shining and strange, life wild at the source staring into his life, stranger to him, yet meeting him ; and he put his face down on her throat, afraid. What was she ? A strong, strange, wild life, that breathed with his in the darkness through this hour. It was all so much bigger than themselves that he was hushed. They had met, and included in their meeting the thrust of the manifold grass stems, the cry of the peewit, the wheel of the stars. (p. 353)

それは感傷的，キリスト教的自己犠牲をしいる愛を拒否する“impersonal”な愛，人間を越えた愛ともいえる。この「言葉」の支配するキリスト教的愛の否定は *The Rainbow* や *Women in Love* の中ではっきりとしたかたちで追求されることになる。ポールは後になってクレアラとも別れるが，それは彼女もまた女性の所有欲で男性を拘束しようとするからである。しかし，クレアラとの愛はポールをキリスト教的「聖なる世界」から解放してくれる重要なモメントとなるのである。

最後にポールの宗教的世界からの解放をもたらす決定的な事件は母親の死

であり，それはまた，ポールにとってキリスト教的「言葉」の支配する世界が没落したことを意味しているのではなかろうか。

> "Mother!" he whispered—"mother!"
>
> She was the only thing that held him up, himself, amid all this. And she was gone, intermingled herself. He wanted her to touch him, have him alongside with her.
>
> But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly. (p. 420)

ラストシーンでポールは母を内蔵している「暗黒」の方ではなく，都会の金色にかがやくあかりに向って生き生きと足早に歩いてゆく。"darkness" は単に死の世界の象徴であるばかりでなく，母なる子宮，さらに，生と死の両面をもつ太母であり，根源的カオスであり，死せる母を内蔵しているゆえに「聖なる世界」のシンボルでもある。一方，ポールが向う町のあかりは「俗なる世界」であり，生き生きとして生命力のあふれている世界，生身の人間が存在し生活している，「肉」が否定されぬ世界をあらわしているのではなかろうか。

（昭和 52 年 5 月 13 日受理）

（註）

（1）Cf. Mark Spilka,"How to Pick Flowers," *The Love Ethic of D.H. Lawrence*(Bloomington, 1955), pp. 39—59 ; Evelyn J. Hinz, "D. H. Lawrence's Clothes Metaphor," *The D. H. Lawrence Review,* I (summer 1968), 87—113.

（2）Charles Rossman, "The Gospel According to D. H. Lawrence : Religion in *Sons and Lovers,*" *D. H. Lawrence Review*, III (Spring 1970), 31—41.

（3）D. H. Lawrence, *Sons and Lovers* (London : Heinemann, 1965), *The Phoenix Edition*, p. 1.

（4）Cf. Charles Rossman, *op. cit.,* pp. 32—35 ; Evelyn J. Hinz, "*Sons and Lovers* : The Archetypal Dimensions of Lawrence's Oedipal Tragedy," *D. H. Lawrence Review*, V (Spring 1972), 49.

(5) Mircea Eliade, *The Sacred and the Profane*, trans. Willard R. Trask (New York, 1959), pp. 68−69.

(6) E. W. Tedlock Jr. ed., "Foreword to *Sons and Lovers*," *D. H. Lawrence and 'Sons and Lovers', Source and Criticism* (New York, 1965), p. 22.

(7) Dorothy Van Ghent, "On *Sons and Lovers,*" *D. H. Lawrence and 'Sons and Lovers', Source and Criticism,* ed. E. W. Tedlock Jr. (New York, 1965), p. 178.

(8) Daniel A. Weiss, *Oedipus in Nottingham*, *D. H. Lawrence* (Seattle, 1962), p. 21.

(9) *The Love Ethic of D. H. Lawrence*, p. 49.

(10) Dorothy Van Ghent, *op. cit.*, p. 179.

(11) *The Sacred and the Profane*, p. 64.

(12) *Ibid.*, p. 65.

(13) Cf. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam, 1974), p. 298.

(14) *Ibid.*

(15) *The Sacred and the Profane*, pp. 156−157.

(16) *Ibid.*, p. 61.

(17) 倉持三郎「D. H. ロレンス−小説の研究」(荒竹出版, 1976), p. 24.

(18) A. M. Daleski, *The Forked Flame*, *A study of D. H. Lawrence* (London, 1965), p.57.

(19) Charles Rossman, *op. cit.*, p. 36.

(20) *The Love Ethic of D. H. Lawrence*, p. 51.

(21) *Ibid.*, p. 53.

(22) D. H. Lawrence, *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious* (London : Heinemann, 1961), p. 76.

「リチャード二世」地誌考

竹　内　　豊

Shakespeare's Place-Names Commentary
King Richard the Second

Yutaka Takeuchi

Abstract

This commentary is designed to treat the names of places in Shakespeare's plays. Although the names of places are formally recorded in nearly every edition. as words, they are summarily dismissed – usually in a line. The names of places stand in the background of the natural environment, and they are closely related with history of man.

This commentary is attempted in the belief that knowledge of names of places is an important step in understanding human works in many fields—especially in literature.

1　London　　1．1．ト書　　SHE－1[1)]

2　Gaunt　　1．1．ト書　　附図2－1B

これは次項3のLancasterと同じくリチャード二世の叔父ジョンJohn（1340．6．24－1399．2．3）についた地名である。昔はどこの国でも個人名にその住む土地の名が付けられることが広く行われ，例えば次郎長というのは「清水港」の次郎長のことであり，国定忠次は「国定村」の長岡忠次郎のことであり，また渥美清の演ずる寅は「葛飾柴又」の寅というように地名がつき，特に領主・貴族にあってはその封土の名で呼ばれた。わが国では加賀候とか薩摩候とか，何々の守等は皆その例である。ただこれらの慣

例は初めの趣旨とは違い，後には爵位に付けられた地名はその貴族の支配地を示すものではなくなった。

ジョンは権力を恣にしたエドワード三世（1312．11．13－1377．6．21．r．1327－77）の第四子[2)]である。彼は，リチャード二世の父，つまりエドワード三世の第一子にして黒太子 Black Prince の有名な綽名で呼ばれたエドワード（1330．6．15－1376．6．8）とは兄弟であった。ジョンはベルギーのこの地ゴーントで生れたのでこの地名を個人名に冠してジョン・オブ・ゴーント John of Gaunt と呼ばれた。英語では Gaunt〔 gɔ:nt 〕または Ghent〔gent〕といわれるが，一般に通用しているのは原地ベルギーのフラマン語 Vlaams のヘント Gent またはフランス語でのガン Gant である。エスコー川 Escaut（ベルギーではスヘルデ川 Scheldt という）とリス Lys（ベルギーではレェイエ Leie）の両川の合流点にあって運河等によって出来た多くの中島に跨って発達したベルギー第二の貿易港市で人口約 151,000 人である。繊維工業を中心とした機械工業と輸出を主とした花卉栽培が盛んである。1816 年創立のヘント大学はこの地方の精神的中心であり，民族意識の昂揚は特に 1916 年この大学で漸くフランス色を脱するに至り，1923 年にはフランス語と並んでフラマン語で教授されるという歴史的事件となり，更に 1930 年にはフラマン語をこの大学における唯一の用語とする法律を成立させた程であった。運河に臨む中世自由都市の面影は今日までよく保存され，ヨーロッパでも最も美しい都市の一つである。1911 年第 11 回ノーベル賞受賞の詩人メーテルリンク Maurice Maeterlinck（1862．8．29－1949．5．6）の生地である。

尚この英名 Gaunt は普通名詞では「痩せた」の意であって，本劇第 2 幕第 1 場 72－83 行にかけてリチャード王とジョン・オブ・ゴーントの会話にはこの語を固有名詞と普通名詞に使い分けてのやり取りがある。

この項については SHE－2．

3 Lancaster 1．1．1 附図 1－2・3 D

封土をいうからランカスターという市のことでなく，州のこと。州はLancasterともLancashireともいわれる。そしてLancsと略称される。イングランド北西部にある州でイングランドで最も人口稠密な地域である。西岸海洋性の湿潤な気候，ペニン山脈の西斜面に広がる肥沃なランカシャー平野はイングランドの農業，特に牧畜生産の中心となっている。またロンドンに次ぐこの国第二の貿易港リヴァプールLiverpool等を有する良好な水運の便，ペニン山脈西側の豊富な石炭等が産業革命以後ここを一大工業地帯とし，特にインドとの綿業貿易はこの地方を英国でも最も繁栄させたところとしたが，第二次世界大戦の直前からランカシャーがその生命線であるインド市場を完全に失ってからはその繁栄は急速に衰微した。「ランカシャーの今日は英国の明日」"Lancashire thinks to-day, what all England will think to-morrow"という諺があるように，かって英国の繁栄を担ったその栄光はこの州の中心部市であるマンチェスター市の市役所(タウン・ホール)の建物に今日も窺うことが出来る。英国の地方都市の中で，また首都ロンドンにおいてもマンチェスター・タウン・ホールに比較する建造物は無いといってもよい。この町の大学のジョン・ライランズJohn Rylands図書館にしても然りで，これまた英国屈指の図書館である。大聖堂と見まがうようなその内部の荘厳さにおいては大英博物館の図書館British Libraryなど比較にならない。ここにも「マンチェスターが今日考えることをロンドンは明日考える」"What Manchester thinks today, London will think to-morrow"という諺の存する所以である。

この州は1267年ヘンリー三世の第二子エドマンドEdmundCrouchback（1245−96)がランカスター伯に封ぜられて王家の中でも特に強力な王家となったが，更にその孫ヘンリー(1300−1361)が1351年にDuke of Lancasterとなってここが王領となるに及んでその権力は更に強化された。この力が最大に強化確立されたのは本劇の中心人物ジョン・オブ・ゴーントによってであった。ジョンは1項に述べたようにエドワード三世の第四子であったが，1359年上記のランカスター公ヘンリーの娘ブラーンチBlancheと結婚してその公家を相続し1362年Duke of Lancasterとなったことによってである。そう

して1396年その権利は英国王領Duchy of Lancasterという名称となって拡大強化され永久に確立された。このようなわけで彼の権力この上もなく，そのため人民の反発を買い，ロンドンのサボイSavoy（附図3－2C）にあった彼の豪館は1381年6月タイラーWat Tyler[3]が率いた農民一揆の連中に同月13日（木曜日）襲われ焼き打ちを受けた[4]。

尚ジョンは英詩の父といわれるチョーサーGeoffrey Chaucer（ca. 1340－1400. 10. 25）のパトロンであった。

4	Hereford	1. 1. 3	SHE－1
5	Norfolk	1. 1. 6	SHE－1
6	Alps	1. 1. 64	

言う迄もなくヨーロッパの主要山脈で，東はオーストラリア東部から起り，西はフランス東南部まで幅は最大150 km，長さ1,000 m以上にわたって東西方向に走り，全体としては地中海側に凹面を向けた三日月型を描いている。占める面積は約33万km²で，フランス，イタリア，スイス，ドイツ，オーストリア及びユーゴスラヴィアを占めている。脈中には4,810 m，ヨーロッパ最高峰のモンブランMont Blancがあり，平均高度は2,500 mである。

Alpsの語源に関しては昔から異説が多く，ローマ人がアルプスの山が年中山頂に白雪を戴いているところから「白い」を意味する彼等のラテン語で*albus*と呼んだに始まるといい，また一説にはゲール語の*alp*やウェイルズ語の*ailp*がいずれも「高い山」を意味し，また非アーリア系語の*alb-*がこれも「高い」とか「山」の意味であるところから発しているともいう。またスイスがアルプス高地の「棚状の牧場」を*alb*と呼んでいるところからAlpsはこの*alb*の転訛したもので「山頂附近の牧場」の意味であるとする説もある。

シェイクスピアは全作品中Alpsの語をこの他に『ジョン王』(1. i. 202),

『ヘンリー五世』(Ⅲ. Ⅴ. 52) 及び『アントニイとクレオパトラ』(Ⅰ. Ⅳ. 66) で使っただけである。

7 Gloucester 1. 1. 100 附図1－5D

グロスターと読む。これもグロスター市のことでなくここでは州のこと。Gloucester とも Gloucestershire とも呼ぶ。Glos. と略称する。イングランド南西部の州で, A. E. ハウスマンが *A Shropshire Lad* のⅩⅩⅠ「ブリードン山」'Bredon Hill' の第1聯及び第2聯で歌っている 'both the shires' と 'the coloured counties' はこのグロスターシャーと隣りのウスターシャーを指している。尚このブリードン山のすぐ南にあるトゥクスベリ Tewkesbury はシェイクスピアの生地を流れるエイヴォン川がセヴァーン川と合流する地点である。

州都のグロスターは英国最長にしてまた最大の流量を持つセヴァーン川 Severn (288 km) 河口に位置する。運河が古くから発達したところで特に州都のグロスターからセヴァーン川河口のバークレー Berkeley (26 項参看) に至る全長 26 km のグロスター・バークレー運河 Gloucester and Berkeley Ship Canal はブリストル海峡を内陸奥深くにまで導いてこの市を重要な貿易港としている。グロスター市はブリタンニア (今日の英国) がローマの属州であった頃にグレヴゥム Glevum と呼ばれ, 武勲輝しい第二アウグスタ軍団[5]の駐屯地であった。

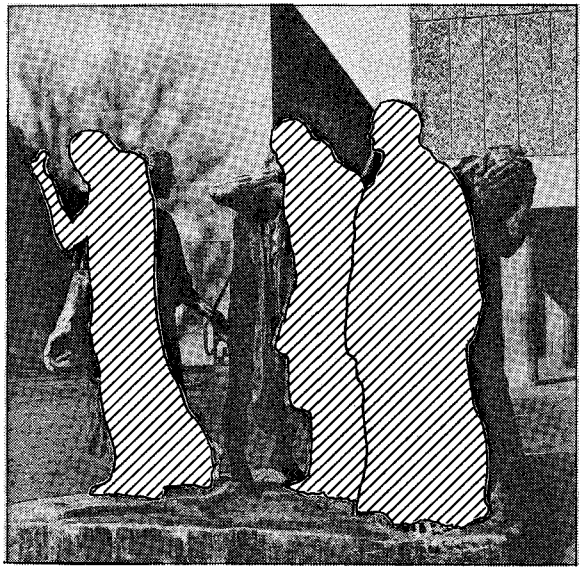
8 Calais 1. 1. 126 附図2－1B

フランス北東部, フランドル平野の海岸線上にあってヨーロッパ大陸とイングランド島とがドーヴァー海峡 Strait of Dover を挟んで最も接近している地点で, その間約 40 km, 英国に渡る「飛脚港」packet-station で, この町とドーヴァー港との間には連絡船が通じ所要時間は普通の船で 90 分, 水中翼

船 Seaspeed Hovercraft では僅か 30 分である。そうしてこゝからヨーロッパ各国の各市に直結する国際列車が発着する。

この町は世界のレース産業の中心地である。

フランスと百年戦争の事を構えたエドワード三世が 1346 年この町を包囲し，１１ヶ月の包囲作戦の後に翌年陥落させ，以来 1558 年まで英国の領有するところとなった。この 11ヶ月を越える包囲作戦に遭って飢餓に苦しむカレー市民を救おうと自ら身を挺した６人の市民がいた。初めカレー市民を皆殺しにする以外の降伏の条件[6]を受けつけなかったエドワード王は廷臣の進言を容れて，カレー市の重立った人間６人の生命と引換えに町を救うことを承諾した。この条件に自ら進み出たのは最も富裕な長老ウスタッシュ・ド・サン・ピエール Eustache de Saint-Pierre であった。続いてジャン・デール Jean d'Aire，そしてジャック・ド・ヴィエッサン Jacques de Wiessant とその弟のピエール・ド・ヴィエッサン Pierre de Wiessant，それにジャン・ド・フィエンス Jean de Fiennes とアンドレ・ダルドル Andrieu d'Andres の６人であった。彼等はいずれも町の財産家であり，有力な地位にある人であった。彼等は自分の生命と引換えに町を救うために，指令通り下着のまま素足で，首には綱を巻き，市門の鍵を持って英王エドワードに赴いたのであった。この英雄を記念するためにカレー市は 1884 年記念像の製作をフランスの彫刻家ロダン François Auguste René Rodin (1840. 11. 12－1917. 11. 17) に依頼した。1884 年から 1888 年にかけてブロンズ『カレーの市民』Les Bourgeois de Calais (英語では The Burghers of Calais という) を作ったが，それはカレー市当局が考える勇壮な英雄の姿ではなかったためロダンとの間に可成りの紆余曲折があったが，ロダンは主張を通し，注文を受けてから 11 年後の 1895 年この町の市庁舎の正面広場に建立された。1915 年ロンドンにこの「群像」のコピーが建てられた。こちらの方は，人質となって市から出てきた６人の犠牲者を殺さず，その命を救ったエドワード三世の寛容な慈悲心[7]を記念するためであった。ロダン自身 1911 年この建立の場所を選定にロンドンに行っており，建立されている場所はロンドン市内でも美しい一帯で，



《カレーの群像》

斜線の三人が前面で右から

ジャン・デール

ウスタッシュ・ド・サン・ピエール

ピエール・ド・ヴィエッサン

その後に三人がいて，左から

ジャン・ド・フィエンス

ジャック・ド・ヴィエッサン

アンドレ・ダルドル

特に夕景が見事なテムズ川畔ヴィクトリア・タワー公園 Victoria Tower Gardens（附図3－3B）で，「群像」は国会議事堂を背にしている。

尚，上野の国立西洋美術館にもこれと同じもの[8]が所蔵されている。

9　Coventry　　1．1．199　　附図1－4E

シェイクスピアの生地ストラットフォード・アポン・エイヴォン Stratford-upon-Avon の町を流れるエイヴォン川を少し遡ったところに明状し難い程美しいロマンティックな城のあるウォリック Warwick という静かな町があり，ここから更に真北に上ったところに今日全く廃址となり乍らも妖しい雰囲気を漂わせる煉瓦色の巨大な城壁の残るケニルワース Kenilworth の町を西北に抜けて程遠くないところに位置する。バーミンガム Birmingham の東南東約 29 km，ロンドンからは北西に鉄道で約 150 km，大英博物館に近いユーストン駅 London Euston St. を出ると急行列車はノンストップで 64 分から 68 分でこの町に着く。人口 334,839（1971 年）でウォリック州の州都である。機械・時計・自動車・自転車・航空機など近代産業の都市である。英国製自動車のトップを切った「デームラ」Daimler が出来たのはこの町で 1896 年であった。このように工業都市であったため 1940 年 11 月 14 日夜から 15 日の朝にかけてドイツ空軍の徹底的な空襲を受けた。この夜イギリスの電波に攪乱されないラヂオ・ビームを持ったドイツ空軍の第 100 戦闘隊 500 機は 600 トンの高性能爆弾と 10,000 個の焼夷弾を雨と降らせてこの町を潰滅させてしまった。死者は 400 名に達したといわれる。このことから「軍需品の生産を低下させるため空襲で破壊する」の意のドイツ語に coventrieren という新語が作られ，それが英語化されて coventrate とか coventrize という語が辞書に加えられた。このような猛烈な空爆によって廃墟となった町の復興は戦後著しく，破壊の跡もわからない程であるが，奇跡的に残ったセント・マイケル大聖堂 St Michael's Cathedral の塔と外壁の一部がこの空爆を歴史に示す記念として残されている。このように事件の跡を何時の世まで忘れず

に伝えるという猛烈な執拗精神はヨーロッパ人の持つ恐しい伝統性である。この記念の残骸の隣りには聖堂とは全く考えられないような何か公会堂かホテルといった感じの前衛的な新しい聖堂が建てられている。これは先ず1956年にエリザベス女王によって定礎式が行われ，1962年5月25日に献堂式が行われたのである。この聖堂の建設にはドイツからの献金もあったと聞いている。

この町を最も有名にしているのは「ゴダイヴァの伝説」である。ゴダイヴァ Godiva（Godgifu とも記す，fl. 1040－1080）とはマーシア伯レオフリック Leofric, Earl of Marcia（？－1057．8．31）の夫人の名である。レオフリック伯はラテン名では Leuricus といい，当時エドワード証信王に娘エディス Edith（Edgitha）を嫁がせるなど権力を得るには手段・節制もないウェセックスのゴドウィン伯 Earl Godwin（1053 没）及びマクベスに殺されたダンカン王の長子マルカムが難を避けてイングランドに逃げて来ていたのを助けてスコットランドに進軍してマクベスを打破って彼をマルカム三世として擁立させ，シェイクスピアの『マクベス』にも登場しているノーサンブリアのシウォード伯 Siward, Earl of Northumberland（1055 没）と共にイングランドを三分するような実力者で，1040年から1042年まで英国王であったデンマークのカヌート二世 Cnut II（Harthacnut または Hardicanute と綽名された）と次の王エドワード証信王に大きな影響力を持っていた人であった。このレオフリックが夫人と共に1043年に創建したベネディクト派の修道院（convent）がこの地名の由来とされている[9]。

さて夫人のゴダイヴァであるが，この名はウィリアム征服王が命じて作らせたドゥームズディ・ブックの中に既に屢々記されており，そうしてコヴェントリの町を愛した夫人は夫が支配するこの町の民が重税に悩んでいることを知って住民の税の軽減を夫に頼んだ。伯は仲々承諾しなかったが夫人が余りにも執拗であったので，もしお前が真昼間町の端から端まで住民の見ている中を真裸で馬に乗って通るならばその願いを聴いてやると冗談半分に言った。それを真に受けた健気な夫人は脛以外の全身が隠れるように髪をふり捌

いで馬に乗って町を通った。これには流石のレオフリックも驚き住民の税を軽くしたというのである。これだけの話では夫人の行為は只善がりの悲壮的なものか，または哀れなものである。しかしそこにはちゃんと救いがあった。日頃夫人を敬愛していた住民は夫人が自分たちの為に裸で道中するということを知って，その姿を見るはとても忍びないから，その時間には街を歩かず，戸を閉めて屋内にいるよう互いに触れを出した。ところが只一人不埒な料簡の男，仕立屋のトムがこれは面白いことと戸の隙間から覗き見をしたところ天罰覿面，彼は忽ちのうちに目が潰れ，「覗き見のトム」Peeping Tom の汚名を後世に残した。それ故にこの町をピーピング・トムの町という人もいる。ただこの「覗き見のトム」の話は 1678 年以前にはないので後世つけ加えられた話らしい。ゴダイヴァの話はセント・アルバンズの修道士にして，またすぐれた年代記作者でもあったウェンドーヴァのロヂャー Roger of Wendover（？－1236）が天地創造から 1235 年までを書いた年代記『歴史の精華』*Flores Historiarum* に最初に見出される。その後いくつかの年代記にもゴダイヴァ夫人の話は載っているがそれらはすべてこのロヂャーのものの亜流である。有名なものでは 17 世紀の廷臣・歴史家のダグデール Sir William Dugdale（1605－1686）の『ウォリックシャーの故事来歴』*Antiquities of Warwickshire*（1656）にあり，これは更にウォリック出身の怒り屋のランドー Walter Savage Landor（1775－1864）がイタリアのフィレンツェで書いた五巻本の『架空の話』*Imaginary Conversation*（1824－29）の中に書いている。また桂冠詩人テニスンが 1842 年に「ゴダイヴァ」*Godiva, A Tale of Coventry* の詩を発表している。その他にも詩人・劇作家のドレエィトン Michael Drayton（1563－1631），ジャーナリスト・詩人・批評家・随筆家として一時世を風靡したリー・ハント James Henry Leigh Hunt（1784－1859）も詩に書いている。ゴダイヴァ夫人の騎馬像は市の中心街ブロードゲイト Broadgate にあるショッピング・センターの広場にある。これは 1949 年リード・ディック Reid Dick という人の手になったものである。

1398 年 9 月本劇でも述べられているノーフォーク公トマス・モーブレー

とヘレフォード公ヘンリー・ボーリングブルック（後のヘンリー四世）がリチャード二世の前で行うとした斬り合いの場はこのコヴェントリの東ゴスフォード・グリーン Gosford Green であった。またこの町はヘンリー四世とヘンリー六世の時代に議会が開かれているが，前者のはリチャード二世から王位を奪ったヘンリー四世が 1404 年この町で法律学者を一切出席させないで開いたために「低能議会」とか「無学議会」*Parliamentum Indoctorum* と綽名された議会であり，後者はバラ戦争の最中の 1458 年多数の人の権利剝奪があった為 *Parliamentum Diabolicum* と綽名されたものであった。

10　Woodstock　　1．II．1　　附図1－5E

ここでいわれる Woodstock's blood というのはグロスター公 Duke of Gloucester のことで，公は元 Thomas of Woodstock といい，エドワード三世の第六子で 1377 年 Earl of Buckingham となり，1385 年 Duke of Gloucester となった。1397 年リチャード二世によって 12 項に述べるプレェイシー Plashy で捕えられ，フランスのカレーに連れて行かれてそこで殺された。9 月 8 日以降 24 日の間といわれる。公が Thomas of Woodstock といわれたのは 1355 年 1 月 7 日にオックスフォドシャーのこの地ウッドストックに生れたためである。ウッドストックはロンドンの北西約 120 km の地点，オックスフォドの北西約 12 km にあり，今はオックスフォドのベッドタウンとなっていて，バスで約 30 分のところである。人口は約 2,000（1971）である。

ヘンリー二世はこゝにマナー・ハウス mannor house（館）を建て猟場としての御料林を設けた。正に地名が表す通りである[10]。

1173 年ヘンリー二世は王妃エレナー Eleanor of Aquitaine（ca. 1123－1204. 4. 1）を幽閉して，1175 年ロザモンド・クリフォード，通称「美しのロザモンド」Fair Rosamond を寵妃としたが，伝説では王はエレナーの嫉妬を恐れてロザモンドをこの御料林の奥深くに迷宮 labyrinth（または maze ともいう）を造って隠まったが，王妃エレナーの嫉妬の執念は誠に凄じく，

幽閉の身にも拘らず手を廻してロザモンドを探し当てて1176年彼女を毒殺したという。ロザモンドの墓石には次のラテン語の碑銘が刻まれていたと伝えられている。

Hic jacet in tumba Rosa mundi, non rosa munda :
Non redolet, sad olet, quae redolere solet.

（ここの墓に眠っているのは世界のバラ（ロザ・ムンディ）であるが，それは清浄のバラではない。生前香わしい人ではあったが，今は芳香ならぬ悪臭を放っている）

エドワード一世の第二子 Edmund of Woodstock（1301－1330. 後の Earl of Kent）がこゝで生れ，またエドワード三世の長子黒太子 Black Prince, Edward of Woodstock もこゝで1330年6月15日に生れ，また上記の通りその第六子もここで生れているのである。

1554年5月23日から1555年4月末までエリザベス一世は姉のメアリ女王によってこゝに監禁されていた。

今一つこのウッドストックで触れなければならないのはブレニム宮殿 Blenheim Palace である。宮殿と記したが王室のものではないので「館」あるいは「御殿」に当るが余りに立派なので日本語では王宮・宮殿の言葉が当てはまるようである。1701年フランスのルイ十四世はスペインの王位継承をめぐりオランダ・イギリスと衝突した。これが1713年まで続いたスペイン継承戦争（イスパニア継承戦役）である。当時の英国王オレンジ公ウィリアム三世は先きに1689年のイギリス「名誉革命」で英国王となったオランダのオラニエ公ウィレム（20項参看）であって，かねてからルイ十四世のオランダ侵略等の野心を挫くことを畢生の業としていた程であったからウィリアム王は対仏大同盟を形成し，その盟主としてルイ十四世に対抗した。決戦は1704年8月13日ドイツ南東部バイエルン Bayern のドナウ川に臨むブリントハイム Blindheim（附図2－2D）で行われた。ここはアウグスブルグ Augsburg の北北西約37 km の今は人口1,000人にも満たない小村である。バイエルン地方というのは今日西ドイツの南東部の州でミュンヘン München がその州都で，英語ではバイエルンがバヴァリア Bavaria となり，ブリントハイムは

ブレニム Blenheim となる。さてその決戦はルイ十四世のフランス・バイエルン連合軍をイギリスの常勝の誉れ高い名将[11]マールバラ公ジョン・チャーチル John Churchill, Duke of Marlborough (1650－1722) が打破って，世界征服をしようとするルイ十四世の高慢な幻を永久に消滅させ，彼の晩年に暗い影を投じさせたのであった。時に英国王はアン女王の時代となっていた。女王はこの大戦勝に対する彼への褒賞として，マナー・ハウスのあるこの地ウッドストックの御料林を下賜し，ここに二階建ての大館を建てて公に与えた。総工費 30 万ポンドでその中の 25 万ポンドが議会から支出された。残りの 5 万ポンドはマールバラ家の支出であった。造営工事は 1705 年に始められ，完成は公の死後の 1727 年であった。18 世紀イギリスにおける最大の規模で，その規模の大きさの一例を示すと大ホールは幅 14 m，長さ 21 m，高さ 20 m で厨房から 100 m も離れているといった程である。規模の大きいことは只建物ばかりでなくその庭園においても桁違いのものであり，またこの宮殿の敷地に今日 100 名程の公爵家の仕事に携わっている人が住んでいるということを聞く時に，玄関の一歩外はもう道路だ，という貧しい住いのわれわれの比較の規準では全く通用しないものである。設計者は 1714 年授爵されたヴァンブルー（ヴァンブラ）Sir John Vanbrugh（Vanburgh．1664－1726．3．26）であった。ヴァンブルーの生涯は曲折に富み，1683 年から 2 年間フランスで建築を学び，1686 年には軍隊に入って 1690 年から 1692 年まで捕虜となり，その捕囚生活の後半はバスティーユ Bastille に投獄されていた。1696 年劇作家に転じ，1705 年までに 10 篇の戯曲を発表して当時シェイクスピア劇などに匹敵するという評判の劇を書いていたコングリーブ William Congreve (1670．4．5－1729．1．19) と並ぶ風俗喜劇作家となっていた。1698 年から建築の実務につき，1705 年ロンドンにヘイマーケット劇場 Haymarket Theatre を建て，同年から 1707 年までこゝの支配人となっている。この劇場は堂々としていたがその音響効果は貧弱であったといわれる。

さてこのブレニム宮は当時の英国では珍しいバロック風建築様式で建てられたが，ヴァンブルーが得意とした割にそのバロック趣味は余り洗練されて

いるとは思われない。

第二次大戦で比類なき統率力を持って英国を勝利に導いたウィンストン・チャーチル Sir Winston Leonard Spencer Churchill はこの公爵家の分家に当るが，彼の父ランドルフ Randolph（1849．2．13－1895．1．24）が第七代マールバラ公の三男であったところからウィンストンは 1874 年 11 月 30 日この宮殿に生れ，またハイド・パーク・ゲートの自宅で 1965 年 1 月 24 日亡くなった彼の墓も先祖のと並んでこの宮殿のすぐ傍の教会墓地にある。チャーチル家は本家・分家共に今やかつての栄光・権力なくその生活窮状といわれている。

11 York　　I．II．62　　SHE－1

12 Plashy　　I．II．66　　附図 1－5 G

表記はこの他に Pleshy，Pleshey, Plessey があるが公に使われているのは Pleshey である。語源的にはフランス語から出たもので權木等で囲った地の意である。町の位置は，かつてイースト・アングリアといった今日のエセックスの州都チェルムズフォード Chelmsford から鉄道で北に 16 km，ロンドンからは約 64 km の地点にグレェイト・ダンモウ Great Dunmow という町があるがこの町とチェルムズフォードを直線で結んだ丁度中間点である。

劇のこの場でグロスター公夫人，つまりグロスター公ウッドストックのトマスの未亡人は亡夫の兄であるゴーントのジョンに夫の復讐を頼んでいる。亡夫は 10 項に記した通り 1397 年リチャード王によってこの地で捕えられ殺されたのであった。

尚第 2 幕第 2 場の 90 行でグロスター公未亡人はこのプレェイシーで死んだと報ぜられるが，実際は 1399 年 10 月 3 日バーキング Barking のベネディクト派の教会堂 Barking Abbey で亡くなっているのである。バーキングはロンドン塔に近いフェンチャーチ・ストリート駅 Fenchurch Street St の約 13

km 東にあるエセックス州に属し，テムズ川の一支流ローディング Roding の流れるロンドンの特別地区 municipal borough であったが 1963 年来大ロンドン州 County of Greater London に入れられている。

13 Derby　　I. III. 35　　附図 1－4 E

こゝでもダービーシャー Derbyshire のこと。州都でもダービーという。イングランド中部にあって農牧業と化学・機械・繊維工業，それに陶器産業が盛んである。ロールズロイス Rolls Royce の航空機エンヂンやその自動車はこのダービーの町で作られる。州都ダービーはかつて英国がローマの属州であった時代にデルヴェンティオ Derventio と呼ばれた古い町でロンドンから北西へ鉄道で 205 km。人口約 21.9 万（1971）である。尚有名なダービー競馬とは無関係である。序いでながら競馬は 1780 年これを創設したのが第十二代ダービー伯であったためダービー競馬の名があるが，行われる場所はロンドンの home counties の一つサレー州のエプソム Epsom という町である。

14 Caucasus　　I. III. 295

英語ではコーカサス Caucasus だが原地名はカフカース Kavkaz である。東はカスピ海，西が黒海，北はクーママヌイチ凹地，南はトルコ及びイランの国境に囲まれた地域。この地方を占めるコーカサス山脈には万年雪をいただき，氷河を抱く 5,000 m以上の高山が聳えている。

シェイクスピアはこの語を全作品で二度使用しているが，そのいずれもが矢張り山を指していて，地方を言っていない。すなわち本劇ではボーリングブルクが「雪の山」といい，『タイタス・アンドロニカス』の第 2 幕第 1 場 17 行でも述べているのはコーカサスの岩頭のことである。この地名の文学作品における記録は実に古く，ギリシァの悲劇詩人アイスキュロス Aischylos（前 525－456）の『縛られたプロメーテゥス』*Prometheus desmotes* の中に既に現

れている。このアイスキュロスの劇の中で，プロメーテウスが人間に火を与えたためにこの巍峨として聳える岩山に縛られているのであるが，シェイクスピアが上記『タイタス』の場で使っているのも同じくプロメーテウスの話である。

15 Ely House　　I．Ⅳ．58　　附図3－2A及び附図4

地名ではないがこの館の所在地について記しておく。イーリーの司教がロンドンに持っていた館で，中世紀のロンドンでは最も印象的な館で黒太子はここに住み，また本劇での通りジョン・オブ・ゴーントはこの館で病床にあって（I．Ⅳ），ここで1399年2月3日亡くなった。

18世紀までは旧ロンドン市のはずれ，今日のセント・ポール大寺院の北西約0.8kmのホーバン・サーカスHolborn Circusのすぐ北にあった。今日こゝに残っているのは当時の礼拝堂で，これは今日もローマ・カトリック教会として使われている。今日この辺りはかつてのイーリー館の庭に面したハットン・ガーデン通りHatton Gardenの名で通っている。

Ely Houseの名称は18世紀になってイーリーの司教がその館をウェストミンスターの議会の近くに移転することを決め，現在ロンドンの中心街ピカディリィ・サーカスからピカディリィ通りを西に少し行ったドーヴァー・ストリートDover Streetの37番地に館を新築してからである。1909年までイーリーの司教のものであったが，その後いろいろな人が変わり住み，1965年からはオックスフォド大学出版局Oxford University Pressが借用している。

本劇のEly Houseはホーバンにあった旧のものを指していることは言う迄もない。

16 Northumberland　　II．I．147　　SHE－1

17 Wiltshire II. I. 215 附図1－5D・E

イングランド南部地方で海に面しない州の一つで，またトマス・ハーディの小説や詩の多くに扱われるところで一般にハーディ・カントリと称されるもののうちの一つである。アルフレッド大王に象徴される古代英国の雄ともいわれるウェセックス王国は今日のウィルトシャー，ドーセット，ハンプシャー，バークシャーの諸州を含んでいたものである。

この州の五分の三はソールズベリー平原 Salisbury Plain と称する石灰質の草原とマールバラ草丘 Marlborough Downs である。この州で最も有名なのはソールズベリー平原にあるストーンヘンヂ Stonehenge である。巨大な石柱群で最高の高さのものは6mを越えるものである。英国の地形はなだらかな草原・丘陵が続き，目を遮るような高い山がないためか島国根性の英国人はこのような程度のものに感心しているらしいが，エジプトのスフィンクスなどを見た眼には少しも驚くことのない貧弱なものである。この巨石を何故このように集め，積み重ねたかは現今も不明である。太陽崇拝説，墳墓説など紛紛としている。この地方の州都ソールズベリーにある大聖堂とオールド・セアラムについて SHE－1。

18 Port le Blanc II. I. 277 附図2－2A

シェイクスピアの版本の中では Port le Blan, le Port Blan, le Port Blanc となっているものもある。フランスのブルターニュ地方のコートゥデュノール県 Côtes-bu-Nord le にある現代名 Port le Blanc という非常に小さな港町である。

19 Brittany II. I. 278 附図2－2A

フランス西部の地方名で大西洋に北西に突出する半島地方で前項18の

コートゥデュノール県などはこの地方に属する。古くはアルモリカ Armorica, 更に古くは Aremorica と呼ばれた。これは「海に臨む地」の意味のケルト語のアルモール Armar から発したものであった。地質上対岸のイギリスの南西部と連絡が保たれているのと同じようにこの地方はイギリスにいたケルト族がゲルマン民族のブリテン島襲来の難を逃れてブリテン島からこの地に逃げてきて住みついた為ローマ人はこの地方を小ブリタンニア Britannia Minor と呼んだことに Brittany の名の由来がある。Brittany の語はフランス語ブリターニュ Bretagne に対する英語である。それ故にか Bretagne とはブリトン人の国の意といわれる。このような理由でこの地方の言葉は特にブリタニー語 Breton といわれる。

尚シェイクスピアの版本によっては Brittaine, Bretagne などとなっている。

20 Exeter II. I. 281 附図1－6C

イギリス南西部，デヴォンシャーの州都。ロンドンのウォータールー駅から3時間40分はかゝる可成りの遠地にある。人口約9.5万（1971）で，1942年ドイツ空軍の爆弾で破壊された為に都市計画が進み新旧の建物の並ぶ落着いた町。今述べたようにロンドンから可成りの遠地である為この地方一帯の開発は最近漸く進んで来た段階であるが，このエクセターの町だけはその歴史は非常に古く，重要な町として発達して来た。すなわちイギリスがローマの属州であった時代のうち西暦50年頃ローマ人がこゝに城塞を築いて町を開き，イスカ・ドゥモニオールム *Isca Dummoniorum* と名づけここを起点とするローマ道路を設けた。この城壁の大部分は1942年のドイツ空爆で破壊されたがその一部が現存しているイギリス最古の町の一つである。そうして英国王室，特にエドワード証信王，ウィリアム征服王，チャールズ一世，オレンヂ公ウィリアム三世などがこの町と密接な関係を持っている。例えばオレンヂ公は1688年11月5日，300隻近い大船隊を率いてオランダを出発し，デ

ヴォン州のトー・ベイ Tor Bay という湾に到着し，翌6日湾の南のブリックスハム Brixham に上陸し，エクセターに無血入城し，市の主教邸に司令部を設け多くの貴族・ジェントルマンの支持を受けてロンドンに向けて進軍し，1689年4月11日英国王位に就いたのであった。オレンジ公の遠征軍の陣容は歩兵が18大隊―1大隊の兵力は約600人，騎兵3,280名，馬4,000頭，その秣300トン，煙草4トン，ビール1,600樽，ブランデー50樽，オレンヂ公専用四輪馬車，予備の長靴1万足，それに移動可能な橋梁と鍛冶工場，貨幣鋳造用の鋳型と印刷機も備えていた。

この町にある12世紀のノルマン様式の端整な美しい大聖堂は特に有名である。高さがそう高くないので辺りの建物が邪魔で見晴しが悪かったがドイツの空爆で東側にあった中世城壁の一部が壊されるなどして見晴しが今はよくなっている。その端緒は670年より早くここに修道院が建てられていたといわれる。聖ボニファース Saint Boniface[12]はこの修道院で研修したと伝えられる。932年に教会堂が建てられたがこれは1003年デーン人によって破壊され，1019年時の英国王も兼ねていたデーン人のカヌート王によって再建された。エドワード証信王は無防衛なクレェディトン Crediton から司教座をエクセターに移す許可を時の司教レオフリック Leofric[13]に与えた。そうして1050年エドワード証信王はレオフリックをこゝの初代司教に任じ，聖堂が建てられた。レオフリックは1072年に亡くなったが彼がこゝに残した所謂「エクセター本」*Codex Exoniensis* (*The Exeter Book*) はまことに貴重な文献である。これは誰かが950年から1000年の間（975年頃と推定される）に書き写したものをレオフリックが1060年頃この聖堂の教会堂に残したものが今日保存されている。内容はＯＥ（古代英語）の哀歌としての代表作品である『さすらいの人』*The Wanderer* や『海行くもの』*The Seafarer* 等である。

21	Canterbury	II．I．282	SHE－1
22	Bretagne	II．I．285	19項に同じ

23 Ravenspurgh II. I. 296 附図1－3G

Ravenspur とも綴る。ハンバー川河口の Spurn Head に近いところで本劇の通り国外追放になっていたボーリングブルックが 1399 年 7 月に上陸した。また追放されていたエドワード一世も 1471 年にこゝに上陸し帰国した。今日この Ravenspurgh はその形跡もない。ハンバー川の三角江で砂州となっているからである。

24 Windsor II. II. ト書 附図1－5F

ロンドンの西方約 32 km, 汽車で 50 分のテムズ川の右岸にある。人口約 1.6 万 (1971) で英国王室の居城ウィンザー城があるので有名。エドワード証信王がこゝに館を持ったが，次のウィリアム征服王はテムズ川を見下ろすチョークの台地に築城を決意した。王が 1070 年こゝを訪れていることは既に知られており，また 1086 年この城はドゥムズディ・ブックに記録されている。城はその後ヘンリー三世，エドワード三世，ヂョーヂ四世によって増改築されて今日の形となった。中でもエドワード三世はこの城で 1312 年 11 月 13 日生れたことは彼にこの城に対する強い愛着となり，王は全イングランドから腕利きの職人を集めて 1350 年頃から改築を始めた。

尚城の対岸徒歩僅かの地に有名なイートン校があるがそれについては SHE－1。

25 Worcester II. I. 58 附図1－4D

ここでは Worcestershire のことをいう。イングランド中部の州で「『ヘンリー八世』地誌考（前篇）」161 頁で記したようにケント州と共に 'the Garden of England' といわれる地味豊かな地方であって，混合農業，酪農，園芸農業特にホップ栽培が盛んでイングランド最大のホップ市場がある。農産加工と

して日本でも馴染のウスター・ソースの生産で名を成している。

州都ウスターは英国の大内乱の時に王党に最後まで忠誠を守り通した町であったが遂に 1651 年若いチャールズ二世はこの町でクロムウェルに惨敗を喫した。1651 年 9 月 3 日クロムウェルによってこの町に包囲されたチャールズ二世はウスター大聖堂の窓から臣下の兵がクロムウェル軍によって潰走させられたのを見ることによってこの内乱の終末は決定づけられたのであった。

この町を流れるセヴァーン川の左岸に沿ってあるウスター大聖堂は古くは聖オズワルド St. Oswald[14]によって修道院として建てられていたものが 1080 年代になってウルフスタン Wulfstan[15]によって建てかえられ，1084 年建造の地下納骨堂が今日残っているこの聖堂の建物のうちの最古の部分である。この納骨堂にノーサンブリアの王で聖人となったオズワルド[16]の形見が祀られている。またこの聖堂には左手に剣を持って奇怪な容貌をした欠地王ジョンの大理石像がある。これはドーセット州のパーベック Purbeck で産する Purbeck marble あるいは Purbeck stone といわれる褐色の上質の石で出来ていて，このジョン王の像が英国王室のものとしては最古の像である。この像は多分ジョン王の没した 1216 年に遅れること 2 年の後に製作されたとされる。

26　Berkeley　　II．II．119　　附図 1 − 5 D

ブリストル湾に注ぐセヴァーン川河口に近いこの町は中世には Berkley といった。その昔アングロ・サクソン時代は Berclea, Beorclea と記した。ロンドンから鉄道で約 250 km の地点で人口僅か 600 人程の眠れるような静かな小さい町である。この小さい町にあるバークリー城はウィリアム征服王の治世に築かれたもので，こゝに最初のプリンス・オブ・ウェイルズであったエドワード二世は 1327 年 9 月 22 日に惨殺され，今日その部屋は殺害の行われたまゝの状態で保存されている。

種痘法の発見者ジェンナー Edward Jenner (1749. 5. 17－1823. 1. 26) の生地でもある。

27 Bristol II. II. 135 附図1－5D

ここは大西洋から大きく湾入したブリストル湾に臨み，グロスター州の州都ではないがこの州切っての大都会，人口約42.5万 (1971)。都市としての歴史は古く18世紀にはロンドンに次ぐ英国第二の都市 — 商易・学芸文化の中心であったが19世紀以降は諸般の事情が相重って繁栄は抑えられたが，近年再び化学・食品・重化学工業が興り，港も国際貿易港として重要な地位を占めて来ている。

ブリストル城はアルフレッド大王の長子エドワード Edward (Eadward, Eadweard とも記録される。綽名は the Elder。? 870－924) によって建てられたと伝えられる。ウィリアム征服王の長子ロバート Robert (1051－1134) を支持する叛軍の拠点となったところでもある。ウィリアム征服王の孫にしてヘンリー一世 (征服王の第三子) の甥のスティーヴン Stephen (ca. 1097－1154. 10. 25) はヘンリー一世が亡くなると王位継承者を自任して即位し，1135年から1154年の約20年間王位にあったが，ヘンリー一世の娘マティルダ Mathilda を支持する派との抗争がその間続き，どちらも決定的な勝利は得られなかった。或る年代記作者がこれ程苦しめられた犠牲者の出た験しはない，と伝える程人民は虐殺され，苦しめられ，略奪された。スティーヴン自身も1141年捕えられて，このブリストル城に送られ，6ヶ月間も鎖で結がれるという一時もあった。また前項に記したエドワード二世がバークレー城で暗殺されたが，バークレー城に移される前はこのブリストル城に幽閉されていた。クロムウェルによって引き起こされた内乱時代王党派が根城としたのはこの城であった。1656年クロムウェルによってこの城は放棄され廃城となった。今日市内のセント・ピーター St. Peter 教会の北側，カースル・ストリート Castle St. とコック・レーン Cock Lane 及びボトル・レーン Bottle

Laneに囲まれたところがその位置である。

尚Bristolの綴りはME（中世英語）ではBristowであった。シェイクスピアの版本によってもBristow, Brist, Bristollとなっている。

28　Catswold　　II. III. 9　　附図1－5D・E

これはグロスター州の東部を西南から東北にかけて連なる山地でコッウォールド山地CotswoldsまたはCotswold Hills, Coteswold Hillsといわれる。また別称コッテスウォールズCotteswoldsともいう。全長約86 km, 幅48 km, 高さ約309 mで西側は急峻であるが東側は勾配が緩やかで立木少なく草地である為牧羊に適し，コッウォールドといわれる毛の深い羊の飼育で有名であり，特にシェイクスピア時代にはこゝは英国における羊毛の生産と羊毛加工産業の中心地であった。今一つこの地方を有名にしているのはCotswold limestoneという石で建てられた町並みの美しさである。この石は白葡萄酒のような，蜂蜜のような色の石灰岩で今日も尚生産されている。

Cotswoldの名の起源については前半のcots-は不確かではあるが「羊」の意であるとされ，後半のwoldは「森林地帯」を意味する。

テムズ川はこの地帯からその源を発する。

29　Salisbury　　II. IV. ト書　　SHE－1

30　Carlisle　　III. II. ト書　　附図1－2D

イングランド最北州カンバーランド州の州都で人口約7.1万(1971)。ロンドンから北西へ鉄道で480 km。ロンドンのユーストン駅を出ると特急で約4時間弱で着く。こゝから東海岸のニュー・カッスル・アポン・タインに鉄道で97 km（1時間45分。この線は普通列車のみ），北東のエディンバラに鉄道で158 km（1時間45分），北にグラスゴーには鉄道で161 km（1時間半）な

ど6本の鉄道がこゝで交わる鉄道交通の要地である。当然道路にあっても非常に重要な地点であり，イングランドはここで終りといった感じのところでスコットランドに近い為ローマ領有時代に軍事上の拠点となりルグヴァルム *Luguvall(i)um* といわれた。東海岸のベリックの町程ではないが頻繁にスコットランド人の侵冠を受けた。それ故にここから東へ英国版万里の長城が築かれたのは120年（完成は127年頃）[17]であった。ルグヴァルムの名はサクソン時代にも引継がれていた。その後ブリトン人によってCear-Luelと名づけられた。これらの名の起りは *Luguvallum* の方は *Lugus* という「神の城壁」の意といわれるが実は *Lugus* というのは *Luguvalos* という個人名で，これは *Lugus* のように強いという意の古い英語から出たとされる。一方Cearはcityの意であり，Luelは *Lugus* の語が9世紀にこう変ったのであった。

われわれ日本人，特に北海道の人間には少しも珍しくない風景をひろげる有名な湖水地方Lake Country of Districtはこの町から南にすぐ下った一帯である。

31 Barkloughly　　Ⅲ．Ⅱ．1　　附図1－4B

リチャード二世がアイルランド遠征から帰国した上陸地点をホリンシェドはBarclowlieと記録していて，シェイクスピアはこれに拠ったものであるが，他の年代記ではその地点をミルフォードMilford（附図1－5A）あるいはペンブロークPembroke（附図1－5B）としている。Barclowlie (Barkloughly)は多分今日のハーレックHarlechであると推測されている。ここはその城で有名で，城はエドワード一世がウェイルズ統合のためにウェイルズに多くの城—Aberystwyth, Beaumaris, Builth Wells, Caenarvon, Conway, Criccieth, Denbigh, Flint, Harlech, Rhuddlan（これらの地はすべて附図1にある）を築いたが，その中でブーマリス城，カーナボン城，コーンウェイ城，フリント城，ハーレック城，ルドラン城はエドワード一世の六城として特に有名である。ハーレック城はかってケルト人の築いた要塞の

あった場所に，王の命によって当時すぐれた築城技術家であったジェイムズ James of St George が 1283 年頃建設に着手し，凡その完成は 1290 年であった。二重の城壁に囲まれた殆んど方形に近い形であって典型的なエドワード王式の築城形態を示しているが，東側と南側に広い濠がめぐらされ，北と西は切り立った崖となって海に通じており，60 m を越える崖の上に円い隅塔とそれを結ぶ城壁とが烈しい緊張感を漂わせて四囲を制圧するばかりに厳しく築かれている為 'bold rock' の名がついており，城郭都市を形成するカーナボン城等と違って，戦闘用の為に一個の全く独立した城塞であり，その雄姿は数 km 先からも望むことが出来る。

バラ戦争で 1468 年この城に赤バラのランカスター軍が 1 年間も立て籠り，ペンブローク伯ハーバート卿 Lord Herebrt, Earl of Pembroke とその弟 Sir Richard Herbert の率いる白バラのヨーク軍を悩ました。城に籠もるウェイルズの忠節な猛将ダフィッド・アブ・アイニオン Dafydd ap Ieuan (Dafydd ab Einion) の守りは固かった。この時にダフィッドが作曲したといわれる「ハーレックの男たちの行進」The March of the Men of Harlech という曲は籠城軍の士気を高めたといわれる。この曲は今日弘くイギリス人に親しまれている。降服勧告に答えたダフィッドの昂然たる答は今日迄伝えられている有名なものである。—"I had once hold a castle in France so long against siege that all the old women in Wales talked of it, and now I will hold a castle in Wales until the old women of France talked of it !" 城門での戦死者は 6,000 人であった。籠城軍の勇敢さに感動したハーバート卿はエドワード四世にダフィッド以下籠城軍の助命を約束させたという。

32 Flint　　III. II. 209　　附図 1 − 3 C

ロンドンのユーストン駅から約 307 km, 美しい中世の町チェスターからは 192 km である。入江が深いディ川 Dee の西河口にある人口 14,660 (1971) の町。エドワード一世が建てたウェイルズの一連の城（前項参看）のうち最も

早く建てられたものの一つで，王は1277年の夏から僅か3年間の突貫工事でこの城を築いた。城の基礎工事等に最初の一週間で10万ポンドと950人の人足を費したといわれる。こういう手早い強引な実行力がエドワード王の持ち味でもあった。城は北と東がディ川に面し，天主閣は城壁の外にあって天主閣の周りの殆んどは濠となっていて，この形態はエドワード王の築城としては唯一の例外的構築である。城は今日甚だしく廃れ，崩れた城壁に連なる崩れかけた隅塔が一つと，城壁の外側に天主閣が残るだけである。1399年8月リチャード二世はボーリングブルックの奸計にかゝってこの城で捕えられ（「ブリタニカ百科事典」はコーンウェイ城としている），9月29日（または30日）に王位を剝奪された（34項参看）。そして10月28日リチャードはヨークシャーのポンティフラアクト城（39項参看）に送られてそこで1400年2月14日餓死したといわれる。

33 Langley　　Ⅲ．Ⅳ．ト書　　附図1－5F

今日のKing's Langleyのこと。ハートフォードシャーの南西部にあってセント・アルバンズの南西である。エドワード三世の第五子初代ヨーク公エドマンドは1341年6月5日この地に生れたのでEdmund de Langleyと呼ばれた。彼は1394年から1399年の間リチャード二世の三度にわたる外征の間に摂政を務めた。この町にある教会King's Langley churchにはヨーク公とその妃イサベラIsabella of Castileの像がある。

34 Westminster Hall　　Ⅳ．Ⅰ．ト書　　附図3－3B

地名ではないが建物の所在場所としてこゝに説明する。図のようにテムズ川西河畔に建つ国会議事堂の建物の下院の一部で西に突き出た部分がウエストミンスター・ホールである。征服王の子の第二代ウィリアム・ルーフスが1097年に創建し，1099年に完成したもので昔はウエストミンスター宮殿の一

部であった。こゝは13世紀から1882年[18]まで王政庁から派生したコモン・ロー裁判所の一つで，他に王座裁判所と財務裁判所があった。1327年エドワード二世が捕えられ廃位を宣せられたのがこゝであった。リチャード二世は1393年の夏このホールを美しく改築した。特にオークで作った屋根は当時のヨーロッパ随一の華麗なものであった。王はこのオークを征服王がハロルドとの戦いで勝利を収めたバトル（SHE－1．p．105）の近くのペトリィPetleyにある御料林King's Wood[19]から集めた。このようにこの建物を改築したリチャード二世の運命はまことに皮肉なもので，王は1399年こゝで廃位させられたのである。このホールにかゝわる運命の皮肉はまだある。1649年1月，時の国王チャールズ一世はこゝで裁判にかけられ死刑となった。王は1649年1月30日午前10時幽閉されていたセント・ジェイムズ宮殿からまだ霜の消えぬセント・ジェイムズ公園を通り抜けてホワイト・ホール（SHE－1，p．101）に向った。沿道には群衆が溢れていた。王はホワイト・ホールに一旦入り，その後外に設けられた処刑台に引き出されて首を切られた。午後2時4分であった。見物人はホワイト・ホールの屋根にまで鈴なりとなった。王の首を切った側の主領，つまり議会派の領袖クロムウェルが1653年護民卿Lord Protectorに就いたのも，また王政復古後彼の首が改めて晒されたのもこのウエストミンスター・ホールであった。そうして今日，右手に剣を，左手にバイブルを持った彼の像が建っているのもまたこの建物の前である。

ウエストミンスター・ホールは1834年の火災からも免がれ，また第二次世界大戦中の1941年の爆撃による破壊も修復されてわれわれはかっての原型に近い姿を見ることが出来る。

35　Surrey　　Ⅳ．Ⅰ．ト書　　SHE－1

36　Venice　　Ⅳ．Ⅰ．97　　附図2－2D

慣用的に使われるベニスの名は英語ヴェニス Venice であってイタリア語ではヴェネツィア Venezia である。イタリア北東部，アドリア海北端，ヴェネツィア湾の西部の浅瀬の洲，すなわち潟 Laguna（ラグーナ）の上に建設された町であるのでヴェネツィアは一名 La citta della laguna ともいわれる。人口約 36.7 万（1969）。町は陸地から 4 km，外海から 2 km 離れ，118 の小島を 177 本の運河と 400 以上の橋とで結んだ水の都で世界的な観光地である。昔は陸地から孤立していたが現在は 1933 年に建設された鉄道橋とこれに並行する道路橋とによって本土と結ばれている。運河のうちで最も有名で最大のものがその名の通りのカナル・グランデ Canale Grande で，長さ 3.8 km，幅 30～70 m，深さ 5 m～5.5 mのこの逆 S 字形の大運河によって町は東北と西南の 2 地区に分かれている。建物は坑の上に基礎を置き，出入口は内側道路にも通じてはいるが，正面は運河に面し，玄関前の階段が船付場となる。潮の干満の差は 60 cmもあって石段は勿論建物の基礎部分も苔に敝れている。記念建築物ともなっている古い 200 の大邸宅・宮殿の殆んどはカナル・グランデに面している。運河には水上バス Vaporette, モーターボート Motoscafo それにゴンドラ Gondola が走るだけでこの町には自動車も走らないことが大きな特色である。

西暦 452 年以前この地方はローマ帝国の中でも最も栄えた町であったが蛮族の侵入で住民は今日のヴェネツィアに移ってこの町を繁栄させ，810 年中世ヨーロッパの最も強力な都市となり「アドリア海の女王」の名を恣にした。1797 年にナポレオンがこの町をオーストリアの支配下に置いた時点でその独立を失い，その後 1866 年にイタリア王国に統合された。12 世紀から 18 世紀にかけての建築様式が数多く見られ，絵画，橋にも貴重なものが多い。またヴェネツィア・ガラスの名で知られるガラスは装飾芸術であり，その他七宝，レース，陶器，木工品などの生産も盛んである。

37 Golgotha　　Ⅳ. Ⅰ. 144　　SMB

38 Troy V. I. 11 SJC

39 Pomfret V. I. 52 附図1－3E

Pontefract のこと。ヨークシャーのリーズ Leeds の約 20 km 南にある人口 31.335 (1971) の町。ロンドンからは鉄道で 293 km。この地名は「壊れた橋」に由来するもので, 1177 年には Pontfreit の形であった。今日の古い地方的発音 ['pʌmfrit] は Pumfrete (1185 年頃—1193 年) と Puntefreit (1226 年) の古い綴りに対応するものである。音〔の最近の地方的発音の ['pɔmfrət] または ['poumfrət] は Pounfre(i)t とシェイクスピアも使っている Pomfret に対応するものである。尚「壊れた橋」として世に有名なものはローマのテヴェレ川に残っている Ponte Rotto である (SJC. p. 370 f.)。ここにあるノルマン式の城は 11 世紀後半にイルバート Ilbert de Lacy という人によって建てられたため Ilbert Castle の名でドゥームズディ・ブックに記録されていた。ジョン・オブ・ゴーント及びその子ヘンリー四世の居城となり, 17 世紀にはイングランドにおける最も強力な城の一つであったと伝えられるが今は廃址である。

本劇の第 5 幕でリチャード王はエクストンの士爵ピヤースに殺されているが, これはシェイクスピアの創作であって, 32 項に述べたように餓死したというのが最も史実に近い。

40 Rutland V. II. 44 附図1－4F

イングランド 40 州の中で最小の州で面積 394 km², 人口約 2.7 万 (1971)。州都オーカム Oakham の人口は僅か約 7,000 人である。

住民の殆んどは農耕従事である。昔から狐狩りで有名なところである。州の最南端のストゥク・ドライ Stoke Dry は火薬陰謀大事件に連座したディグビー卿の生地である (SMB, p. 333)。

41 Oxford V. II. 52 SHE－2

42 Cicester V. VI. 3 附図1－5E

今日はCirencesterと記してサイ（ア）レンセスターと発音するが，今日でもCirencesterをシセスターと発音する人がいるが，これはシェイクスピア時代のCicesterに対する発音の名残りである。当時はまたCiceterとも綴られた。ローマ領有時代はコリニィウム・ドォブゥノールム *Corinium Dobunorum* と呼ばれ，リンカンからエクセターに至るフォス・ウェイという主要なローマン・ロードと他の道路とが交叉する重要な地点であって，当時ブリタンニアにおけるローマ植民都市の中で二番目に大きい町であったが，ローマ軍の撤退後は忽ちのうちに廃れた。グロスターの南東約23 kmに位置する人口13,022（1971）の町でロンドンから鉄道で155 kmである。

43 Kent V. VI. 8 附図1－5G

ヨーロッパ大陸に最も近い位置にあることと気候がよく地味豊かなためにイングランドで最も早く開けた地方（本地誌考8項及びSHE－2の32項と43項参看）。紀元前55年と同54年ジュリアス・シーザーがブリタンニアに遠征した時上陸したのがこのケントの海岸であったし，第四代ローマ皇帝クラウディウスが遠征でブリタンニアに上陸した時にもその地点はケントの海岸であった[20]。またローマ領有時代が終る時蛮族に悩まされたブリトン王が救いを求め，それに応じて大陸から渡来してきたアングロ・サクソンの部族が上陸したのもこのケントのサネット島であった（SHE－1の28項）。またキリスト教がこの国に入ったのもこの地からであった。このためカンタベリにある大聖堂がこの国最大の総本山となっている（SHE－1の28項）。

このようにこの地誌考シリーズの中で既に何回となく触れてきたところである。

44 Bordeaux Ⅴ. Ⅳ. 33 SHE－1

45 Holy Land Ⅴ. Ⅵ. 49

パレスチナ Palestine〔英〕のこと。聖書の主要な背景をなす地方で，古くはカナンと呼ばれた。元々「低地・平地」の意で，ヨルダン川西部の全地域を指した。今日では東はヨルダン渓谷地帯，西は地中海に面し，北はレバノン山脈を境としてシリアに接し，南はユダヤ高地の尽きる所から砂漠となってシナイ半島の荒野に至り，アラビアやエジプトに連なる地方をその範囲としている。聖地エルサレムがあり，またこの地方が「アブラハムとその子孫に与えられた約束の地」であり，出エジプトもこの約束の地カナンを目指すものであり，「イスラエルの地」，「ヘブル人の地」，「主が約束した地」，「良く広い地」，「主が顧みられる所」，「全地の中で最も素晴らしい所」，「乳と蜜の流れる所」，「聖地」であるため常に宗教上の争地となり，十字軍の征戦場となり，今日イスラエル共和国とヨルダン王国とに二分されているが，絶えず国際的紛争の地に今もって変わりがない。

主イエスの誕生の頃はローマ帝国が領有するところでローマの総督の支配下にあって，イエス・キリストを十字架にかけたポンテオ・ピラト Pontios Pilatos（〔英〕Pilate）はその第五代総督であった。

本劇この場でボーリングブルックが述べているように彼はリチャード二世を殺した罪の償いにパレスチナに行くことを考えていた。尚ボーリングブルックは既に 1392 年から 1393 年にかけてパレスチナに順礼しており，また彼は 1413 年 3 月 20 日にウエストミンスター大寺院の「イエルサレムの間」で亡くなっている。

尚 SMB の 2 項を参看されたい。

（昭和 52 年 5 月 20 日受理）

［注］

1）　筆者が既に書いた「地誌考」を参看されたい旨の場合には次のように略記した。
『ヘンリー八世』地誌考（前篇）…SHE－1
『ヘンリー八世』地誌考（後篇）…SHE－2
『マクベス』地誌考…SMB
『ジュリアス・シーザー』地誌考…SJC

2）　第三子とされることもある。それは第二子の William が夭逝しているがためである。人名録には屢々このような違いのあるのはそのためである。

3）　Walter Tyler ともいう。生年・出生及び生涯の殆んどが不明。彼の生涯の最後の9日間だけが歴史に残っている。1381年の農民一揆の指導者。エセックス州のコルチェスター Colchester（附図1－5G）で生れてそこで煉瓦工（tiler）であったらしい。労働者条例・人頭税・その他の経済的不満に抗議して1381年6月10日（月）結集した反乱農民はケント州で蜂起し，メイドストーン Maidstone（附図1－5G）でその指導者に選ばれた彼は一揆を率いてカンタベリ，ロチェスターを経てロンドンを襲い，リチャード二世に謁して農奴制の廃止・商業の自由の制限の除去・反徒に対する恩赦の要求を約束させた（6月14日）。その後カンタベリの大司教サドベリ Simon Sudbury を反逆者としてロンドン塔で処刑した。ジョン・オブ・ゴーントも反逆者の一人としてリストにあがっていたが，偶々スコットランドに行っていて難を免れた。翌日タイラーは再び王と会見し，新たな要求を承認させようとしたが王たちの謀略にかゝり，彼はロンドン市長のウォールワース William Walworth に斬られた。1381年6月15日の夕闇の中であった。

彼は志操堅固・頭脳明晰で極めて公明正大な常識の持ち主であった。彼はジョン・オブ・ゴートンのサボイの豪館を焼打ちするに当っても自分たちが単なる暴徒・掠奪者でないことを撒底させ，ゴーントの家族を予め立ち退かせた程であった。

4）　この館は元来は1240年，ヘンリー三世の王妃の叔父であって小シャルマーニュ Little Charlemagne と呼ばれたサヴォア公ピエール Peter, Earl of Savoy（1203－1268. 5. 15）がヘンリー三世に招かれて英国に来て滞在中に建造されたものでそれは1245年頃とされる。チョーサーはここで結婚式を挙げたと信ぜられている。一揆によって焼かれたがその後ヘンリー七世によって1505年病院として再建された。その後礼拝堂がこゝに建えられたが1864年焼失した。しかしヴィクトリア女王はそれを再建しそれが現存している（附図3－2C）。

5）　竹内豊，『BOUDICCA—真実と詩』（室工大研究報告文科篇　8－3）p. 112

6）　当時英国の漁民はカレー市の漁民によって常に大きな打撃を受けていたためである。

7）　実は当時懐妊していた王妃の願いをきき入れたのであった。

8）　一般にブロンズ彫刻は原型が残る限り複数の作品を作ることが出来る。しかも一

旦鋳造されたブロンズからではなく，石膏等の原型から鋳造されたものはこれ皆すべて本物と称する。国立西洋美術館のものは松方コレクションが日本に返還されるに当ってロダン美術館の原型から特に新たに鋳造されたものであるのでコピーではない。小学館の『日本百科大事典』に複製と説明されているがこれは説明不足である。

9） ロンドンの有名なコヴェント・ガーデン Covent Garden（附図3－2C）の名は「修道院の庭」convent garden のつまって出来た名である（筆者『BOUDICCA』p．345参看）。

10） Woodstock の名は1000年頃アングロ・サクソン法典Anglo-Saxon Laws に Wudustoc と，1123年には『アングロ・サクソン年代記』に Wudestoke と記録されていた。1150年頃ダーラムのシィメオン Symeon of Durham が残した *Historia ecclesiæ Dunelmensis* と *Historia regum* に *'Wdestoc, quod Latine dicitur silvarum locus'* と記録されている。これはこの地がラテン語で森のある場所と呼ばれたことを示したものである。

尚この地名は奇しくも木で罪人の足をはさむ為に出来た「足かせ」の意ともなり，この足かせが原形のまゝこの町の教会にある。

11） この場合われわれは名将の言葉に‘人格上すぐれた’などの倫理上の意味を不用意に含ませてはならない。マールバラ公は金・名誉・権力を得る為には全く手段を選ばず，しかもそれを本人は全く疚しいものでないと思っている権数謀略の人であった。

12） 680－755。デボンシャーのカートン Kirton 又は Crediton に生れ，元の名は Winfrid 又は Winfrith であった。Boniface の名は彼の司祭としての精進献身に対して教皇グレゴリオ二世によって与えられたと伝えられる。716年二人の徒僧を従えて大陸に渡り主としてドイツで伝道し‘Apostle of Germany’といわれた。754年 Friesland（今日のオランダの北部）に福音伝道の為に赴いたが755年6月5日 Dokkum で異教徒に襲われて殺された。

13） ラテン名 Lefricus。コーンウォールに生れたといわれる。ローサンリンジア Lotharingia（今日のフランス北東部ロレーヌ Lorraine 地方）で教育を受けた。この教育が終生彼に強い影響を与え，大陸のキリスト教会の理想と改革の理想を植えつけた。エドワード証信王付の懺悔僧となった。彼はクレェディトンのような海賊の襲撃を受け易い場所に司教座のあることに不満で城塞されているエクセターに移したい旨を書面にして彼の部下の Lanbert をローマの教皇レオ九世に使いさせた。教皇は証信王にそれを認めるように指示し，従順な証信王は自ら王妃と共に1050年エクセターに出向いてレオフリックに会ってそれを許した。レオフリックは多くの聖衣や礼拝用品それに60巻に近い書籍を教会に残した。蔵書の中の28巻は英語で書かれたもので，その中の一つに *Liber Exoniensis* として知られる詩文書は有名でこれが British Library にコピーされ，1842年 *Codex Exoniensis* として出版され，更に1933年別のものも附加された復製本が出版された。

14） ベネディクト修道士としてフランスで修業。961年から992年までウスター司教。また972年から992年までヨークの司教も兼ねた。992年2月29日没。

15) またはWolstan。1012年頃ウォリック近くのロング・イッチントンLong Itchingtonに生れる。ピーターバラ等で教育を受けた。彼は教えを乞う者は何人も厭わず，特に貧者の子の洗礼に自身出向きしかも無料を常とした。僧院にいない僧は金を貰わずにも洗礼をするのが任だというのが彼の主張であった。1062年ウスター司教となった。ノーマン・コンクェスト以後征服王に仕えた。没年は1095年で死後直ちに聖人に列せられた。

16) SHE－2の172頁参看。

17) SHE－2の175頁－176頁参看。

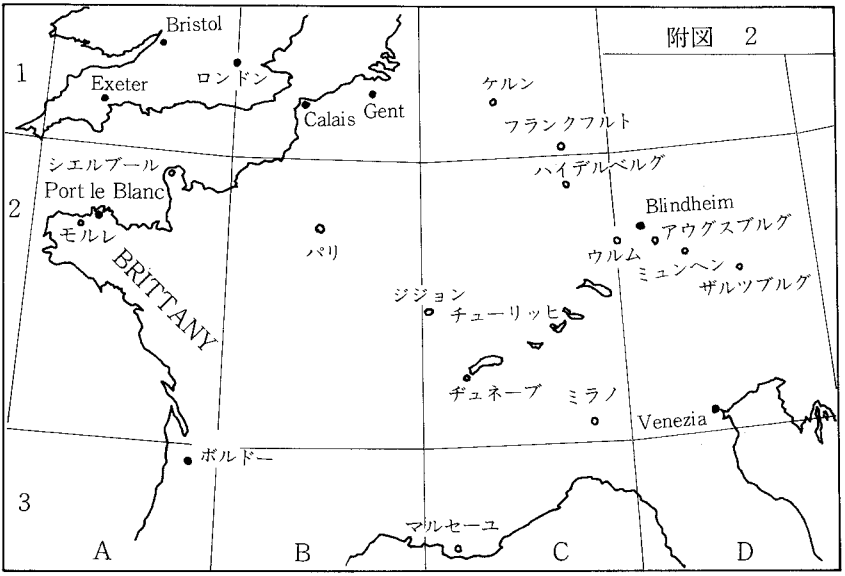
18) ロンドンのストランド街に1874年にロウ・コーツ Law Courts（正式名Royal Courts of Justice. 附図3－1C）の建築が始められそれが1882年に完成したからである。白亜に緑の屋根の美しいゴシック建築のこの建物はこの場所に変わりなく現存している。

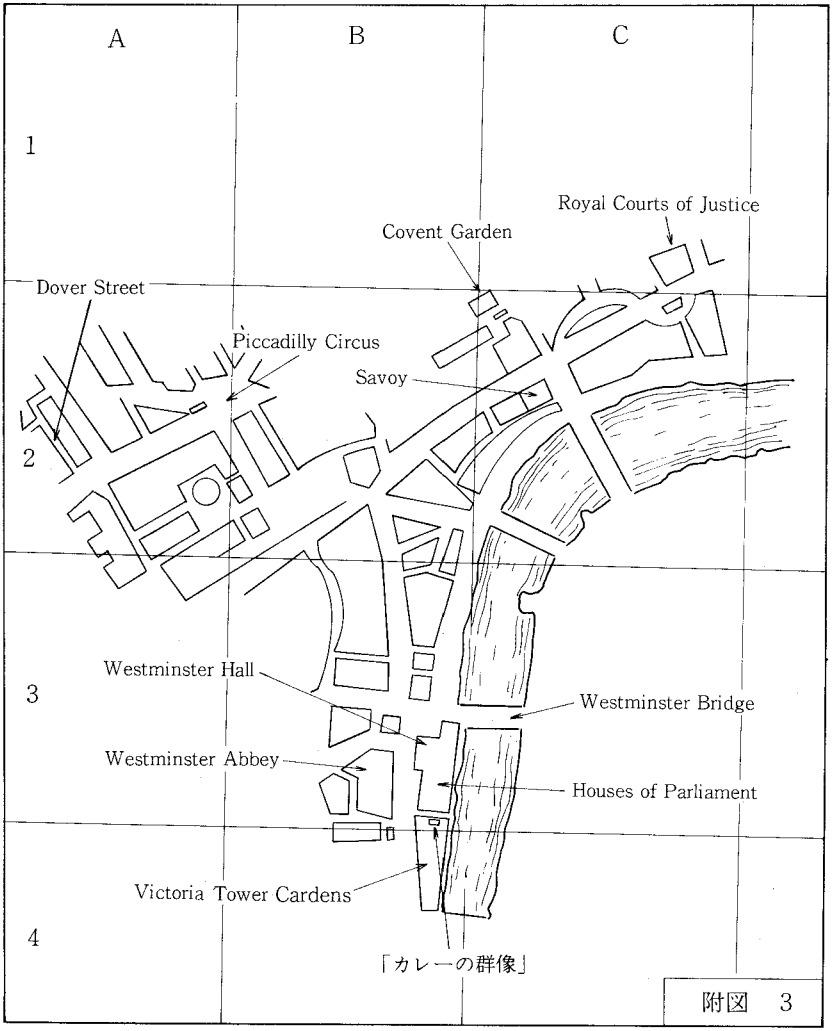
19) ペトリィもキングス・ウッドも探し当らない。ただこの辺りにはOakの名のつく地名が非常に多いところからこの一帯はオークが大量に生産をされたものと考えられる。

20) 筆者の『BOUDICCA－真実と詩』（室工大研究報告文科篇8－3）の293頁及び318頁を参看されたい。

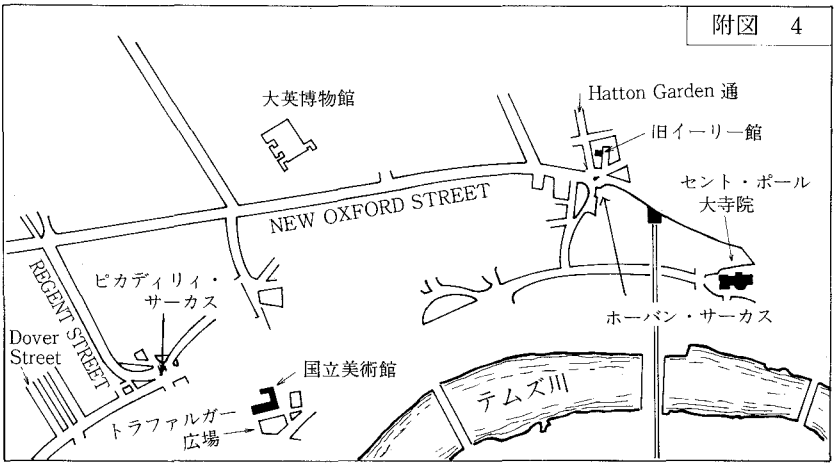
A
B
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
Berwick
Carlisle
Newcastle
LANCASHIRE
York
Manchester
Pontefract
Ravemspur
Liverpool
Beaumaris
Rhuddlan
Conway
Flint
Caenarvon
Denbigh
Criccieth
Harlech
Derby
RUTLAND
Oakham
Coventry
Aberystwyth
Worcester
Warwick
Builth Wells
Tewkesbury
Gloucester
COTSWOLDS
Woodstock
Colchester
Pleshey
Milford
Berkeley
St. Albans
Pembroke
Cirencester
Oxford
King's Langley
Bristol
Windsor
Maidstone
WILTSHIRE
Epsom
Salisbury
KENT
Crediton
Exeter
Tor Bay
Brixham

附図 1


附図 2
Bristol
ロンドン
Exeter
Calais
Gent
ケルン
フランクフルト
ハイデルベルグ
シエルブール
Port le Blanc
モルレ
BRITTANY
パリ
Blindheim
アウグスブルグ
ウルム
ミュンヘン
ザルツブルグ
ジジョン
チューリッヒ
ヂュネーブ
ミラノ
Venezia
ボルドー
マルセーユ
1
2
3
A
B
C
D


A
B
C
1
2
3
4
Royal Courts of Justice
Covent Garden
Dover Street
Piccadilly Circus
Savoy
Westminster Hall
Westminster Bridge
Westminster Abbey
Houses of Parliament
Victoria Tower Cardens
「カレーの群像」

附図 3


附図 4
大英博物館
Hatton Garden 通
旧イーリー館
セント・ポール
大寺院
NEW OXFORD STREET
REGENT STREET
ピカディリィ・
サーカス
Dover
Street
ホーバン・サーカス
国立美術館
テムズ川
トラファルガー
広場

教官学術研究発表集録

文　科　編

(昭和 51.4.1～52.3.31)

保健管理センター

田中豊典	青年期の健康の諸問題について（第3報）　第1部　青年期，特に大学生の保健意識調査	新日本製鉄株式会社室蘭製鉄所病院医誌第17巻第1号	51. 4
田中豊典	青年期の健康の諸問題について（第3報）　第2部　青年期，特に大学生の健康障害調査	新日本製鉄株式会社室蘭製鉄所病院医誌第17巻第1号	51. 4
田中豊典	新利尿降圧剤ブリザイド錠の使用経験	新日本製鉄株式会社室蘭製鉄所病院医誌第17巻第1号	51. 4
田中潜次郎	二分評定型意味微分法の試用	北海道心理学会・東北心理学会第3回合同大会	51. 9.11
田中潜次郎	自己評定による特性用語の分析 — 特性用語の記述性と評価性 —	日本心理学会第40回大会	51. 9.28
田中潜次郎	ＵＰＩの項目分析	日本教育心理学会第18回総会	51.10. 5

人文科学

Satoshi Oide	Die Finsternis im scholastischen Gottesbeweis	Alte Fragen und neue Wege des Denkens (Festschrift für Josef Stallmach) Bouvier, Bonn	1977
馬場雄二	単純作業役の複雑図形の照合過程におけるＩＳＩの意味	第17回日本人間工学会発表論文集	51. 7

馬 場 雄 二	北海道人に関する風土心理学的考察(1)	第40回日本心理学会発表論文集	51. 9
馬 場 雄 二	複雑図形の照合適正時間と図形の回転による順応性	第18回日本教育心理学会発表論文集	51.10
馬 場 雄 二	単純作業後の複雑図形の照合過程におけるＩＳＩの適正時間について	第3回北海道・東北合同心理学大会発表論文集	51. 9

CONTENTS

Cultural Science

Vol. 9, No. 2 **Dec., 1977** **Whole No. 27**

Trait-adjectives and an Adjective Check-list
..... Senjiro Tanaka 2 (1) 275
On *Sons and Lovers*
— The Release from the Christian World —
.....Takashi Toyokuni 2 (43) 317
Shekespeare,s Place-Names Commentary
King Richard the Second .....Yutaka Takeuchi 2 (61) 335

昭和52年12月5日　印　刷
昭和52年12月10日　発　行　（非売品）

編集兼発行者　室蘭工業大学

印刷所　協業組合　高速印刷センター
営業所／札幌市中央区北4条西3丁目
北洋相銀ビル6F
TEL 271－5101（代）
工　場／札幌市西区手稲稲穂472
TEL 682－1325